# 歌路學振兴

一般社団法人日本私立獣医科大学協会

2019. 3 8 🕏





EAEVE総会(ドイツ・ハノーバー大学にて)

## **Contents**

#### 巻頭言

獣医学教育の国際認証について

酪農学園大学 学長 竹花 一成 1 一般社団法人 日本私立獣医科大学協会 事務局長

#### 特集1 獣医学教育の認証評価について

日本獣医生命科学大学における獣医学教育評価への対応状況 日本獣医生命科学大学 獣医学部獣医学科 教授 羽山 伸一 4 獣医学教育評価を受審して

麻布大学 事務局総務部経営企画課 田中 秀和 麻布大学 獣医学部獣医学科 教授 折戸 謙介 7

日本大学の事情と分野別第三者評価

日本大学 生物資源科学部獣医学科 教授 杉谷 博士 11

酪農学園大学における獣医学教育の認証評価について

酪農学園大学 獣医学群獣医学類 教授 山下 和人 15

2019年度受審に向けた北里大学の対応

北里大学 獣医学部獣医学科 教授 上野 俊治 18

#### 特集2 2020入試改革について

2020年度入試改革に向けた対応

酪農学園大学 獣医学群獣医学類 教授 翁長 武紀 24

2021年度入学者への北里大学獣医学部の入学試験

北里大学 獣医学部 教授 髙井 伸二 26

日本獣医生命科学大学における入学試験の現状と課題

日本獣医生命科学大学 獣医学部獣医学科 教授 鈴木 浩悦 28

2021年度入試改革に向けて

麻布大学 事務局教務部入試課 柳原新太郎

麻布大学 獣医学部獣医学科 教授 折戸 謙介 30

日本大学獣医学科入試状況について

日本大学 生物資源科学部獣医学科 教授 渋谷 久 33

## 卷頭言

# 獣医学教育の国際認証について

酷農学園大学 学長 **竹花** 一成 一般社団法人 日本私立獣医科大学協会 事務局長

日本の大学は、現在学校教育法第109条により、教育研究等の状況について一定期間ごとに文部科学大臣から認証を受けた評価機関による評価(認証評価)を受けることが義務付けられています。この評価は大学の教育研究水準の向上に資するため、自ら点検及び評価を行い、それを基に改革・改善に努めるにすぎません。

一方、「教育の質保証」が今世紀に入り問われ続けられています。この「教育の質保証」とは具体的に"大学でどの様な教育が実施され、どの様に機能し、その恩恵をどの様に関係者が受けるか"といった事を第三者による分析を通し評価されるものです。この「教育の質保証」を計る視点には、主に①卓越度、②評価機関によって定められた基準に対する適合度、③自らが定める目標に対する達成度、および④関係者の満足度が考えられています。すなわち、「高等教育の質保証」とは、上記の4つの視点に基づき、教育の質を確保することによって利害関係者の信頼を得ることを指します。

さて、ライセンス教育の一つの獣医学教育では、 それに見合う教育内容として臨床系教育が特に充分 ではありませんでした。そのため、全国大学獣医学 関係代表者協議会(全獣協)は、①コアカリキュラ ムの制定、②共通教科書の作成、③獣医学共用試験 の実施、④参加型臨床実習の実施、⑤第三者評価の 実施を獣医学教育の改革の柱として掲げ、臨床系教 育の充実を図ろうとしています。特に、参加型臨床 実習では、その円滑な実施と獣医師法第17条に対す る違法性の齟却を目的とした獣医学共用試験を確実 に実施するため、各獣医大学においては診療施設の 拡充、臨床系実習内容の充実そして臨床系教員増が 計られてきました。(一社)日本私立獣医科大学協 会(私獣協)加盟大学は上記の5項目の実行を約束 事として獣医学教育の改善を進めてきました。特に ⑤第三者評価の実施については既に麻布大学、日本 大学、および酪農学園大学が大学基準協会による獣 医学教育の認証評価をクリアし、北里大学ならび日 本獣医生命科学大学も受審を予定しています。しか し、この大学基準協会による獣医学教育の認証評価 はあくまで国内事情を反映した内容であり、日本の 国益にも叶う国際的通用性を有する獣医師を輩出す るための評価基準とは別次元の内容で進められてい る事も改めて認識すべきです。

国際獣疫事務局 (OIE) は世界の動物衛生向上を目指す立場から、日本を含む加盟180ヵ国における獣医学教育の改善に向けた標準教育の遂行を第1回OIE獣医学教育国際会議(2009年10月、パリ、フランス)で勧告し、"Day One Competencies(獣医大学卒業生が職についた初日から獣医師として働くために身につけるべき能力)"を2012年5月に公表しています。今後の我が国の獣医学教育では、各大学がOIEの"Day One Competencies"を具体化・明確化し、国際競争力を担保していくことが必要不可欠になっていくと考えます。

では何故、獣医学において国際競争力を担保する 獣医学教育の国際的認証評価に向かわなければなら ないかということになります。現在、獣医学教育の 国際的認証評価には、米国獣医師会(AVMA)と 欧州獣医学教育機関協会(EAEVE)による認証評 価等が存在し、いずれもその教育基本方針として OIEの"Day One Competencies"を明確に示してい ます。EAEVEによる獣医学教育の認証評価は自由 貿易地域におけるお互いの畜産物等の安全・安心を 保障するシステムを教育段階から担保するものとし て始まったものです。全ての職業分野において国際 化が強く叫ばれる中、どの分野でも自由化の波が押 し寄せ、国際競争力が一層求められています。その 中で農業分野は他の分野に比べて歩みが遅れてはい るものの、世界経済をリードする欧米諸国において 日本の獣医師免許取得者による検査では法的保障が 必須な農畜作物の安全性を保障できなくなる事態を 招く時が来る事は否定できません。即ちこの事は獣 医師資格の国際的格差であり、我が国の非優位性を 示すものに他ありません。このような事態を回避す るためにも、我が国の獣医学教育全体が国際的な獣 医学教育認証機関による評価を受け、獣医学教育の 質保証を得ることが必要と考えます。日本における 獣医師養成課程を有する大学が、日本の獣医師免 許取得者の"Day One Competencies"を担保するこ とを目指し自らの獣医学教育の質を向上し、国際的 認証評価を得る事は、ひいては我が国の国益に叶う 事になります。現状では、北海道大学・帯広畜産大 学 (VetNorth JAPAN) および山口大学・鹿児島 大学 (VetJapan South) の二つの共同教育過程が 入学定員80名の獣医学教育規模でEAEVE認証の取 得を目指し、獣医学教育の改善に取り組んでいま す。これらの共同教育過程のEAEVE認証取得申請 には国主導で多額の国税が投入されており、それ 故、EAEVE認証を得ることは間違いないと思われ ます。しかしながら、国から大きな援助を得られて いない残された獣医大学の獣医学教育の改善はどう なるのだろうという苦しい胸の内があるにも関わら ず、これらの問題に関して具体的な議論に取り組も うとしない全獣協の存在には疑問を感じざるを得ま せん。

さて、私獣協加盟大学は、従前から自助努力で教 育改革を取り進めてきており、研究主体である国公

立大学とは明らかに異なる路線を標榜し、継承して きました。我々は、獣医師養成教育が如何に重要で あるかを認識し、獣医学教育の質的保証を模索して 独自に相互評価を重ねてきました。しかし、前述の ように、今後の獣医学教育では、各獣医大学がOIE の"Day One Competencies"を具体化・明確化し、 国際競争力を担保していくことが必要不可欠と考え られます。我々私獣協加盟大学は、今まで独自に積 み重ねてきた相互評価と大学基準協会による第三者 評価を基に国際競争力を担保すべく、さらなる教育 改善に意義を求めていくべきです。私獣協加盟大学 の中では、酪農学園大学が単独で入学定員120名の 教育規模でEAEVE認証取得に取り組むことを2018 年6月に申請しております。昨今、話題となってい る「陸王」や「下町ロケット」ではありませんが、 田舎の小さな私立大学が教育改善を求めて自助努力 で国際認証を目指すにはいくつもの壁が立ちはだか ることでしょう。しかし、国際通用性の観点から自 らの獣医学教育の状況を点検し、獣医学教育の国際 認証に合致させるべく継続的に教育改善に努めるこ とが、我が国と欧米の獣医師資格との国際的格差を 最小限に留める効果的な方策であることは間違いな く、獣医学生をはじめとする我が国の多くの獣医関 係者が満足する獣医学教育を提供できるものと期待 され、誇れるべきものではないでしょうか。私立大 学における教育は、各大学がそれぞれの理念「建学 の精神」を基に行うことが何より重要であり、各大 学の獣医師養成に対する思いが現れるものです。私 獣協加盟大学は、獣医学教育の国際認証を取得する 事を最終目的とするのではなく、我々が独自に積み 重ねてきた獣医学教育の相互評価と大学基準協会に よる第三者評価を基に、国際的認証評価による獣医 学教育の改善を通して国際競争力を担保し、さらに は欧米を凌駕する日本独自の獣医師養成教育体系の 構築を目指すべきです。何より、私獣協加盟大学は、 国際化に耐える多くの人材を輩出できるよう一層の 整備を進められる事を切に期待致します。

#### 日本獣医生命科学大学における獣医学教育評価への対応状況

日本獣医生命科学大学 獣医学部獣医学科 教授 羽山 伸一

#### 獣医学教育評価を受審して

麻布大学 事務局総務部経営企画課 田中 秀和麻布大学 獣医学部獣医学科 教授 折戸 謙介

#### 日本大学の事情と分野別第三者評価

日本大学 生物資源科学部獣医学科 教授 杉谷 博士

#### 酪農学園大学における獣医学教育の認証評価について

酪農学園大学 獣医学群獣医学類 教授 山下 和人

#### 2019年度受審に向けた北里大学の対応

北里大学 獣医学部獣医学科 教授 上野 俊治

# 日本獣医生命科学大学における 獣医学教育評価への対応状況

日本獣医生命科学大学 獣医学部獣医学科 教授 (自己評価委員会獣医学教育評価小委員会 委員長)

羽山 伸一

#### プレ評価の受審

2017年度から始まった獣医学教育評価であるが、 評価基準や審査手法を検討するため、2015年度にプレ評価が実施されるということになった。

本学では、2016年度に大学機関別認証評価(公益 財団法人 日本高等教育評価機構)を受審する計画 で、2012年度から自己評価委員会が、その対応やエ ビデンスの整備を進めているところであった。当時、 私はこの委員会で委員長を拝命していた。

プレ審査の打診が各大学にあったころ、さっそく 本委員会で受審するか否かの議論を行った。当時の 学部長から、早い段階で受審して、むしろ不備をた くさん指摘していただき、本審査までに改善に取り 組むほうが本学の発展には得策なのでは、という進 言があり、プレ審査に立候補することとした。

学内では、すでに機関別認証評価の受審にむけた 検討体制やエビデンスの収集もスタートしていたの で、早い段階でプレ審査の受審を決断できたのだと 思う。2014年に自己評価委員会の作業部会として大 学評価ワーキンググループ (WG)を設置して、こ れらの第三者評価を受けるための体制を作った。こ れ以降、本学では第三者評価を活かしながら大学改 革に取り組むことになり、これらへの対応が複層的 に関わることになる。それらの関係を、下記の図1

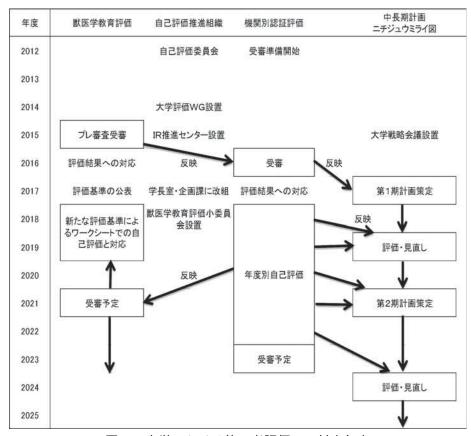


図1 本学における第三者評価への対応年表

「本学における第三者評価への対応年表」に示したので参照されたい。

しかし、実際に受審準備をしてみると、評価項目 が機関別認証評価と異なる部分も多く、資料作成に は多くの時間が割かれることになった。当時の本学 には、第三者評価を受審するための専門事務組織が 無かったために、事務担当者には大いに苦労をかけ てしまった。ただ、この経験から専門事務組織の必 要性が強く認識され、その後の体制整備につなげる ことができた。

受審時の面談調査には、本学獣医学部長、獣医学 科長、動物医療センター院長、教務部長、自己評価 委員長、事務部長で対応した。

このプレ受審でいただいた評価結果は、おおむね 適切なものとして本学では受けとめることができ た。一部の評価基準や評価結果について、疑義を指 摘させていただいたが、その後のパブリックコメン トでほとんど適切に対応されたと考えている。

#### 評価結果を受けた取り組み

受審後、自己評価委員会では、いただいた評価結果を分析し、改善すべき事項を抽出する作業を行っ

た。その結果、改善に向けた取り組みが必要な事項 は16項目にのぼることが明らかとなった。

このうち、受審翌年の2016年度中に対応可能な事項について取り組む一方で、この年のパブリックコメントを受けた最終的な獣医学教育評価基準が大学基準協会から公表される予定となった。そのため、すぐに対応可能な2項目について改善を行い、それ以外の項目については新たな基準の公表を待つこととした。

2016年に機関別認証評価を受審するにあたり、 2015年から事務担当部局としてIR推進センターが 設置され、獣医学教育評価結果への対応と同時並行 で準備作業が進められた。

これらの受審準備や受審後の対応を効率的、効果 的に行うには、評価項目ごとに現状と課題を整理し たワークシートの作成が適していると気づかされ た。

本学では、下記の図2に示したように、基準項目 および評価の視点ごとに、自己点検評価した結果を 定期的にまとめている。この内容をもとに、獣医学 教育評価では、自己評価委員会に設置された小委員 会で現状を分析し、改善が必要と判断された場合に

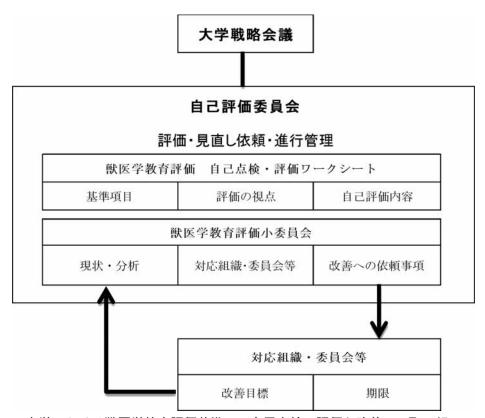


図2 本学における獣医学教育評価基準への自己点検・評価と改善への取り組みフロー

は、その対応組織(部署、委員会等)に対して、具 体的な改善策の検討を依頼している。

各対応組織では、改善の目標とその達成時期を定め、小委員会へ回答する。この回答結果を再度、小 委員会で評価して、内容の可否を決定し、必要に応 じて対応組織へ見直しを指示することになってい る。

これらの改善策について、学長をトップとする大 学戦略会議の指示のもとに、自己評価委員会が達成 状況を見ながら進行管理を行うことで、着実に目標 に近づくことができると考えている。

#### 中長期計画の策定と自己評価

これまで本学では、機関別認証評価を定期的に受審し、その評価結果に対応することで大学改革を進めてきた。その成果は少なからずあったと考えているが、一方で課題対応型の改革は、場当たり的で発展性もなかったのが実情である。

そこで、2015年に学長のリーダーシップのもとで、 大学運営のために設置された大学戦略会議では、本 学の創立150周年となる2031年をゴールとした大学 ビジョンとそれを実現するための中長期計画を定め ることになった。

中期計画の策定にあたっては、大学戦略会議にプロジェクトチームを設置し、全教職員の4割近くにあたる71名をメンバーとして検討作業を行った。プロジェクトチームでは、1年間にわたりワークショップ等を開催しながら、本学の将来ビジョンと実現のためのアクションを練り上げていった。

この中長期計画は、2031年までの約15年間を3期に分け、5年を単位とした実行計画として策定した。この計画の策定、見直し、進行管理を進めるべく、IR推進センターを設置し、また2017年にはこれを学長直属の組織として学長室・企画課へ改組して、本計画の運用をはかっているところである。

この中長期計画の策定にあたっては、それまで受審した第三者評価の評価結果を反映させ、とくに改善への取り組みの優先度の高いものから実行計画へ盛り込むこととしている。

まだ、本計画による事業はスタートしたばかりであるが、2018年から年度ごとに各事業の自己評価を

実施することになったため、その点検・評価結果は 次年度事業へ反映させるとともに、2019年度に予定 している第1期中長期計画の中間評価と見直しにも 反映させる予定である。

このように、本学では独自の中長期計画に基づく 事業を毎年度に自己評価することで、定期的に受審 する機関別認証評価へ効率的に対応することが可能 になると期待している。また、これらの自己評価の 取り組みは、獣医学教育評価の受審準備を兼ねるこ とにもなっている。

## 獣医学教育評価の受審時期について

本学は、2015年度にプレ受審した評価結果、および新たな評価基準に対応すべく、現在改革を進めている。

ただ、本学の立地や学生ニーズなどの関係で、とくに産業動物を対象とした体制整備が不十分であり、この点はプレ受審でも指摘されている。これらの課題に対応すべく、取り組みを始めているものの、施設整備や人材確保に苦慮しているのが実情である。

なるべく早い段階での対応に努力はしているところではあるが、評価基準の中には過去5年間にさかのぼって実績を評価されるものが少なからずあり、この点で本学が受審する時期を決めきらないでいる。

本学としては、これまで述べてきたかたちで自己 評価と改善への取り組みを重ねながら、他大学にお ける評価結果などの情報をいただくことで、受審時 期を最終的に定めていきたいと考えている。

なお、2018年9月に開催された全国大学獣医学関係代表者協議会において、稲葉睦会長より「2023年までに全国16大学が本格的評価を受審するように」との要請があった。この際に、本学と共にプレ受審した東京大学から2023年に受審する計画であるとの意向を得たので、本学も2023年を目途に受審できるように準備は進めたい。

# 獣医学教育評価を受審して

麻布大学 事務局総務部経営企画課 (経営企画課主監)

田中 秀和

麻布大学 獣医学部獣医学科 教授 (獣医学科長)

折戸 謙介

## 麻布大学の獣医学教育評価受審までの経緯

2017年度から開始した獣医学教育評価は、2011年3月に、文部科学省「獣医学教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議」が、教育内容の改善を目指した第三者機関による教育評価の実施を求める提言がなされたことに始まる。この提言に基づいて、評価機関として、「全国大学獣医学関係代表者協議会」から公益財団法人大学基準協会(以下「協会」という。)に、獣医学教育の第三者評価の実施依頼がなされ、2017年度に獣医学教育評価を正式に開始することとなった。

この獣医学教育評価では、獣医学教育学士課程の 水準の向上を図ること及び教育の質を社会に対して 広く保証することを目的としており、従来の大学機関 別認証評価で行われている報告書形式を改め、専用 の自己点検・評価ワークシートを活用した方法で評価 を実施することとされた。

この評価サイクルは、大学機関別認証評価と同様、 7年に一度であり、評価結果において、改善を要する 課題の指摘があった時には、評価結果後3年を経過 した翌年7月末までに改善報告書の提出が義務付け られた。

この獣医学教育評価のポイントは、獣医学教育の質の向上であり、学士課程に焦点を絞った評価であるため、大学機関別認証評価で行われる「管理運営」「財務」等は評価項目の対象には含まれない特徴がある。また、獣医学教育評価では、獣医学教育にかかわる様々な観点について、定量的評価を中心に、それらを総括した定性的評価を行い、最終評価結果として総合評価がなされることとなっている。

麻布大学では、2016年11月25日に協会主催の獣医 学教育評価説明会に出席し、獣医学教育評価の取り 進め方等について、我が国最初の獣医学教育評価を 受審すべく、この評価に関する情報収集を開始した。

情報収集の過程で、これまで本学が取り組んできた獣医学教育について、改めて、これまでの歴史的経緯及びその変遷について理解するとともに、本学の獣医学教育の特徴と課題について再発見し、この評価に耐えられる見通しが立った。また、この時期、本学では、機関別認証評価を受審することが決まっていたこともあって、機関別認証評価と獣医学教育評価を別々の評価サイクルで受審するよりは、本学のような小さな大学では、受審に必要な諸準備等を考慮しても、受審年度の業務量は膨らむものの、トータルで考え一括して受審することの方が得策ではないかとの判断に至り、2017年度に我が国初の獣医学教育評価を受審することを決定した。

決定後、本学の評価組織である自己点検・評価本部の下に獣医学教育評価部会を設置し、獣医学学士課程に対する評価であることを踏まえ、これを獣医学科長を責任者とする評価組織とし、以下の図1に示した態勢でこの評価に臨んだ。

準備作業としては、図1に示したとおり、各評価項目ごとに事務局と教員組織において役割分担をし、事務局にあっては主として定量的データ収集とその整理を、評価を担当する各教員にあっては主として獣医学教育にかかわる実態の説明及び評価の所見作成に当たった。

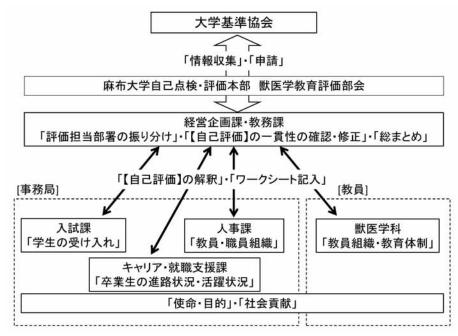


図1:獣医学教育評価に係る本学の態勢

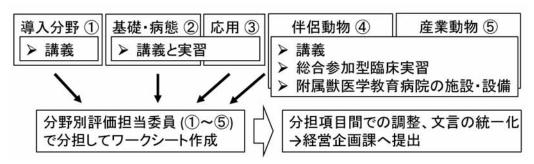


図2:獣医学科教員による自己採点

それぞれの分野において評価担当委員を決定し、講義と実習およびその設備、施設について状況を把握して、 ワークシートに記入した。その後委員会を開催して、各部門間の評価基準レベルと文言の統一化を図り、経営 企画課に提出した。

#### 教員による自己採点

獣医学教育評価ハンドブックの「教育課程・学習成果」「教員・教員組織」「教育研究等環境」のセクションで、事務局の定量的データでは判断できない教育研究のソフトならびにハード面について、教員がワークシートの作成と根拠資料のまとめを実施した。また教育環境は実習により事情が異なるため、学科内で分野別評価担当委員を任命し、それぞれの委員が「導入分野」「基礎・病態獣医学系」、「応用獣医学系」、「臨床獣医学系(伴侶動物)」、「臨床獣医学系(産業動物)」についてワークシートを作成した。その後委員会を開催し、分野間での評価レベルの統一化を図るとともに、分野を跨ぐ質問項目への対応を行った。文言の整理を行った後に、経営企画課に完成した書

#### 類を提出した。

なお「自己点検・評価ワークシート」の作成基準日は、「原則として評価実施前年度の5月1日」であるため、本学では2016年度の教育を対象として評価する必要があった。調査時の2017年度には共用試験が実施され、参加型臨床実習も開始されていたが、本評価には、「共用試験・参加型臨床実習は未実施」と書かざるを得なかった。このように作成基準日から改善、変更されていることや、今後対応予定であることが少なからずあった。このようなワークシートの自己評価の判定点数に反映できない内容や、大学独自の対応で点数には入れることができないような内容は、ワークシートの特記事項記入欄に記入した。

#### 大学基準協会への事前相談・改善・草案受理

これらの取組後、獣医学部長及び獣医学科長において、最終所見の作成に当たった。

最終所見作成後、素案として取りまとめ、正式申請に先立ち、協会の事前相談を受けた。事前相談では、素案の内容を評価していただいたところ、この評価の特徴である自己点検・評価ワークシートに基づき、4段階評価の「2」ないし「1」の評価のときには、改善に関する所見を記入する必要があり、その所見の記入の仕方において、協会が求める内容になっていなかったため、改めて書き換える必要が生じた。

これを持ち帰り、改めて自己点検・評価ワークシートの全評価項目を精査することとなり、草案提出期限である2017年1月末まで、大学入試センター試験の対応と並行して、草案作成にとりかかり各位の協力により、期限までに草案提出にこぎつけることができた。

#### 根拠資料の作成と最終版の提出

その後、草案を正式に受理する旨、協会から通知があり、根拠資料の作成と最終版の提出作業に取りかかった。根拠資料の作成は、もっぱら獣医学教育に関する施設・整備状況や獣医学教育モデル・コア・カリキュラムへの対応状況、当時は未実施であった参加型臨床実習の実施計画書の作成など、自己点検・評価ワークシートに記載した内容を裏付ける資料作成及びシラバス等の既に印刷物となっている各種冊子体等の資料収集に当たった。

年度末という多忙な時期でありながら、また、本学は第2期の機関別認証評価を受ける時期でもあったため、極めて忙しい時期であったが、なんとか、最終提出期限である2017年3月末までに、評価に必要な資料の提出に至った。

#### 実地調査

資料提出を経て一息ついたが、その年の5月下旬には、協会から実地調査日について連絡があり、本学は、機関別認証評価も同時に受審しているため、機関別認証評価の実地調査日と連続した日程でお願いすることとなり、その結果、2017年10月11日から13日の3日間で双方の実地調査を受けることが正式に決まり、初日の10月11日に獣医学教育評価の実地調査を

受けることとなった。

実地調査に先立ち、前月の9月上旬に、評価委員会からの質問書である分科会報告書(案)が本学に送達され、この内容に基づき、約20日間で回答書及び回答書を裏付ける追加の根拠資料を作成し、実地調査14日前に当たる2017年9月28日付けで回答書を提出した。

実地調査の前日には、評価者氏名が公表され、北 海道大学、北里大学及び日本大学の獣医学科教員が 本学の獣医学教育評価委員に選任された。

実地調査では、施設見学及び授業見学を実施した ほか、ヒアリングに先立って、学生インタビューが行 われ、各学年から一人ずつ選抜した学生から意見聴 取が行われた。

ヒアリングでは、この評価責任者である獣医学科 長より、冒頭にあらかじめ割り当てられた20分間を用 いて、「本学獣医学科のあゆみ」と題して、獣医学教 育の変遷及び現在の獣医学教育の特徴、さらには麻 布大学の変遷と研究教育の特色、課題についてプレ ゼンテーションを行った。具体的には、麻布大学の建 学の精神『学理の討究と誠実なる実践』について解 説し、獣医学教育の5つの柱「基礎獣医学系」、「病 態獣医学系」、「生産獣医学系」、「臨床獣医学系」「環 境獣医学系」の6年間での学びについて、各系の教 員の配置 (教授などの役職者の数) とともに紹介した。 また、学生が各教科のつながりを把握するためのカリ キュラム・ツリーや、モデル・コア・カリキュラムへ の対応の体制(コアカリ各科目に責任者をおいて、将 来の変更に対応できる体制)について紹介した。最 後に、今後の課題として、自己点検・評価の更なる 実施や国家試験の合格率改善、附属動物病院施設の 改善などについて言及した。

このプレゼンテーション及び提出した自己点検・評価ワークシートに基づき、約2時間のヒアリング調査を受け、個々の課題について、本学の見解を述べるとともに、より良い獣医学教育の在り方について質疑応答・意見交換を行った。

## 評価結果の送達と修正意見提案

実地調査後、約2か月を経て、12月下旬に、獣医 学教育評価結果(委員会案)が本学に送達され、適 格認定案が示されていたことから、この時点で、事 実上、我が国初となる獣医学教育評価の認定が得ら れたこととなり、担当者としては安堵した瞬間でも あった。

委員会案では、機関別認証評価結果案とも比較したところ、学生支援の内容に誤解があったため、一部修正意見を提案し修正内容が反映されて最終評価結果となった。

最終評価結果では、「長所」と「勧告」がゼロであり、「特色」が6項目、「検討課題」が11項目の指摘を受ける結果であった。

今後、全国17の獣医系大学の一大学として特徴ある 獣医学教育を推進していくべきとの認識のもとで、今 後の麻布大学獣医学科のあるべき姿を議論している。

#### 評価後の対応

「検討課題」の11項目について、2021年7月までに改善状況を協会に報告することが義務付けられている。このため、検討課題を、予算措置が必要なものと、改善するための取組に要する時間軸から短期で対応できるものと長期の時間をかけて解決するものなどに分類し、課題解決に向けて教育担当部署が主体となって、具体的な案について議論を重ねているところである。

表. 麻布大学の獣医学教育評価結果の概要 (第108回全国大学獣医学関係代表者協議会資料から抜粋)

長所	特色	検討課題	勧告
なし	【指特性 ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) (	【指摘数:11】 ・教育課程の不備 ・教育課程の不備 ・教育内容の不備 ・教育内容の不信 ・教育内容関における病理解 ・ 教育の不足 ・ の表現の不足 ・ の未職人のの一個の一個の一個の一個の一個の一個の一個の一個の一個の一個の一個の一個の一個	なし

#### 受審を終えて

協会が実施する獣医学教育評価について、2018年 3月14日付けで我が国初の適格認定を受けたが、ここまでの道のりについて、改めて整理してみた。他の大学において、今後、受審するであろう、協会が実施する獣医学教育評価に対して、少しでも役に立つ情報として活用していただければ幸いである。

- 1. 本学の場合、機関別認証評価の評価組織と獣医学教育評価の評価組織が、共に協会であったため、同時に評価を受けることで、実地調査等の評価スケジュールの調整など、協会に御配慮をいただき、円滑に評価スケジュールを設定することができたことは幸いであった。
- 2. 自己評価ワークシートにおいて、4段階評価を行う際、「2」と「1」に該当する項目をピックアップして、あらかじめ自大学の獣医学教育の課題を整理しておくことによって、自大学の獣医学教育に対する強み・弱みを的確に把握することでできる。これにより、的確な自己評価ワークシートが作成できるのではないか。また、4段階評価のうち「2」と「1」に該当する項目については、実地調査で意見ができるように、手持ち資料を作成しておくと、分科会報告書に対する回答書を円滑に作成できる。
- 3. 現在の大学教育において課題となっている「教育の質保証」と「学修成果」は、機関別認証評価であっても、獣医学教育評価であっても、取り上げられるので、入念な準備をしておくことを勧める。

最後に、この獣医学教育評価は、文部科学省「獣医学教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議」の提言から、7年の歳月を経て本格実施となった。

この評価を受けて、獣医学教育改革は、本格的に 走り始めたように、一担当者として感じた。

獣医学教育の基礎となる部分をモデル・コア・カリキュラムが支え、各大学の特色を、獣医学教育評価により、社会に対して積極的に示していくことによって、獣医学教育界全体の発展につながることと思われた。今後とも、獣医学教育評価システムの発展に寄与できれば幸いである。

# 日本大学の事情と分野別第三者評価

日本大学 生物資源科学部獣医学科 教授 杉谷 博士

日本大学の場合、他の私立獣医科大学と大きく異なる点がある。それは、獣医学部として独立がなされてはおらず、一学科として生物資源科学部に属している点である。生物資源科学部は獣医学科を含め12学科で構成されているが、各学科におけるイベントは学部長の決裁を必要とする。さらに、学長決裁を必要とする場合には、日本大学の法人本部に伺いを立てねばならない制度となっている。この制度の下で、第三者評価の申請にあたった。

#### 学部の理解:

2011年3月に文部科学省に設置されていた「獣医学教育の改善・充実のための調査研究協力者会議」による提言がなされ、同年5月のそれが公表されたた時点では、本学の獣医学科においても、これからの獣医学教育においてどのような取り組みがなされるかを把握している教員は少なかったのではないだろうか。しかし、獣医学教育モデル・コア・カリキュラムの策定がなされたこと、さらに共用試験が実施されることに及んで、少しずつその内容について理解が深まっていったと思われる。

先の提言に含まれている分野別第三者評価についても、全国大学獣医学関係代表者協議会(以下全獣協)において大学基準協会(以下基準協会)により実施されることが決定されたことを受け、全獣協に参加している教員からは早い時点で評価を受ける話が出ていた。早い時点で評価を受け、コメントが付いた部分について、学部に理解をしてもらい、改善を進めることが一学科としてできることと考えていたためである。しかし、第三者評価実施についても、獣医学科教員間でコンセンサスを得た訳ではなかった。

さて、獣医学科の教員にしてそうであるならば、 生物資源科学部においてはなおさら理解には時間が かかるのではないかという懸念があった。生物資源 科学部長は獣医学とは殆ど縁がない方である。その ため、学部長をはじめ、次長、学務担当、学生担当 等の学部執行部の先生方と、獣医学科主任、大学院 専攻主任等を含めた獣医学科教員との話し合いの機 会を持って頂き、全獣協とはどういう組織であり、 その中で獣医学教育の改革がどのように行われてい るかを理解して頂くことからスタートした。さらに、 学部長には全獣協にも出席を頂き、さらに、2015年 に一般社団法人として設立された日本私立獣医科大 学協会(以下私獣協)の会議にも理事として参加を 頂いた。そのような機会を増やすことで、獣医学教 育改革の進捗に理解を頂く努力をし、最初の基準協 会への第三者評価申請校にしたいと考えていた。

ところが、2015年12月に前学部長は定年退職され、現在の大矢祐治学部長に生物資源科学部運営が移ることとなった。また、執行部メンバーも変わったが、残念ながら獣医学教育改革についての引継ぎはなされていなかった。そのため、また最初から獣医学教育の改革について先生方に理解を頂かねばならなくなった。大矢学部長には私獣協の理事に就いて頂き、全獣協を含む会議にも参加を頂いている。また、幸いにも、学部次長職に獣医学科の丸山総一教授が就かれたので、丸山次長を窓口として第三者評価申請がなされることになったが、2017年度に評価を受ける最初の申請には至らず、1年遅れの2018年度に評価が実施されることになった。

#### 費用の交渉:

2015年9月に、大学の定員超過抑制のために2016 年度から入学定員を上回った場合に私立大学等経常 費補助金を減らすという施策を文部科学省は発表し た。日本大学のような収容定員8000人以上の大規模 大学では、2016年から3年かけて徐々に定員数を減らし、2018年の時点で1.1倍を超えた場合は私学助成が全額不交付になるというものであった。2018年9月の時点では、このペナルティーの実行は当面見送られたが、日本大学は規模が大きいだけに、この定員超過率の厳格化が大学の財政に及ぼす影響が試算され、1.0倍で2016年度予算比は100億円の減収になると発表された。さらに、2019年に予定されている消費税の引き上げによる影響で支出が15億円増えるという。この値が生物資源科学部にも影響し、様々な支出引き締めが始められた。

その折に、分野別第三者評価申請の話である。評価費用の250万円(本来は300万円であるが、日本大学は基準協会の正会員なので50万円安い)を経理長にお願いに行くと、大学における経費削減の話となり、評価申請は獣医学科のイベントではないかという話である。また、大学が受けている機関評価とどこが異なるのか、という質問があり、分野別評価の説明をせねばならなかった。

分野別第三者評価は獣医学科の評価ではあるが、 獣医学科としては学部さらには日本大学の一学科と して扱ってもらいたい意識が強くある。もし基準協 会から何らかのコメントが付き、それに対応をしな くてはならぬ場合、特に費用がかかるケースでは、 学科としての対応は不可能と考えたからである。結 局は学部予算で賄うことになったが、獣医学教育改 革が学科単位で行われているという状況からは逃れ られていない。

#### 申請の準備:

評価の申請にあたっては、評価年度の前年度1月末までに申請書を提出する必要がある。また、「自己点検・評価ワークシート(以下ワークシート)」及び「提出資料」を揃えて郵送する必要がある。この1月末までというのが、ちょうど学期末と入学試験準備等が重なっており、生物資源科学部としては極めて忙しい時期となる。資料の収集や提出資料の作成等には事務方の協力が必要であるが、事務職員の数は12学科を有する学部としては極めて少ない。そのため、職員の方は学部の業務に追われる状況であったため、必要資料の準備を優先させて協力を仰ぐことは難しいと考えた。

そこで、ワークシート作成は獣医学科が行い、必要資料の準備のみ事務方にお願いすることとなった。しかし、獣医学科の教員数も極めて少ない上、事務方と同様、年度末で多忙を極めているので余計な負担はかけたくはない。そこで、まとめ役としての仕事を杉谷が引き受けることとなった。

杉谷は2017年3月で定年を迎えたが、同年4月より再雇用教授として在籍を許されていた。ただ、役職を含む手当てのつく委員会メンバー等には就くことができない条件の立場であるため、学部のビックイベントである入学試験の担当者にはなれない。ここに目をつけた獣医学科主任の森友忠昭教授から評価申請のための資料作成のまとめ役を依頼され、引き受けることとなった。ちなみに、この原稿もその延長上で依頼を受けた次第である。

資料収集にあたっては、学科主任から学部長、事務局長にお願いして事務方の協力を仰ぎ、準備ができたものを杉谷が集めて回り、それを基にワークシートを埋めていった。

獣医学科の教員には、科内会議の折に協力を仰ぎ、どの部分を誰が担当するかを決定した。教員各自の負担軽減と効率を考えて、必要な部分のフォームのみをメールで配布し、締切日を決めてデータの収集を行った。事務的な部分は各課の課長に最小限のフォームを送ってデータを記載して頂いた。それを集めて統一した文章として構成を考えた。その後の科内でのチェックは、第三者評価の評価委員としての経験のある渋谷人教授にお願いした。

あくまでも書類は大学本部から提出することになるので、出来上がった資料に庶務課に目を通してもらい、さらにそれを大学本部にみてチェックしてもらうことになった。早めに提出をして、本部の担当者に確認してもらったところ、獣医学に関する知識はもたないので後は学部と学科に任せるとなった。文言のチェックは、以前に機関別第三者評価資料作成に関わったという庶務課の方にお任せをした。その方が最終版資料を、基準協会に持参、提出をした。申請資料は「郵送で」とありますとうかがうと、大学本部と基準協会が同じ市ヶ谷にあることから、そのような方法をとったとのことであった。こういったところも本大学らしいところである。

#### 実施調査準備:

評価にあたっては、実施調査も行われるが、実施の事前に「分科会報告書(案)」が送られてくる。それには評価者による評価結果が「保留」となっているものが多くあった。送った資料の内容とワークシートへの記載が異なっている部分にはコメントが付けられており、評価が保留とされていた。また、モデル・コア・カリキュラム上必要とされるが、本学科ではこれから開始が予定されている実習科目などには、「実施状況を直接面談・関連資料等で確認したい」というコメントが添えられていた。

さらに、項目ごとに「質問事項」が列挙されており、それに対しては「回答」あるいは「見解」を準備して実施前に基準協会に提出せねばならない。「分科会報告書(案)」が届いたのが8月末であり、評価実施日の予定が10月初旬であったが、回答送付は、実施の10日前が締切日となっていたので、その作業も短時間で行わなければならなかった。質問ごとに内容を確認して担当者を分担して決め、回答あるいは見解を作成してもらい、申請時の資料作成同様に杉谷がまとめ役に回った。

一方、事前回答ではないが、「実施調査の際に閲覧を希望する資料」というものがあり、それも準備をせねばならなかった。例えば、教員の専門分野と授業科目の関係を明確にするために、過去5年間の業績をまとめた一覧表、外部資金に関しては科学研究費補助金以外の助成金も含めた獲得状況、研究課題の一覧等も準備依頼があった。ワークシートにはないものなので、記入しやすいフォームを作成し、全教員に記載をしてもらってまとめ上げた。

他にも、実施当日のタイムスケジュール、施設見学予定表、評価者を含む基準協会用の控室等の準備も必要であった。学生インタビューもあるため、そのメンバーを3年~5年次の男女1名ずつの学生に参加をお願いし、その名簿も提出した。この事前の準備にあたっては、庶務課に全面的な協力をお願いした。しかし、人事異動があり、文言チェックなどをして頂いた担当の方が異動になってしまっていたので(これも日本大学の事情である)、新しい担当の方にご協力を頂き、何とか期日までに資料を整えた。

#### 実地調査:

実施当日は、評価委員の先生方3名と大学基準協会の方2名が来校された。どなたが委員として来られるかは気になるところであったが、ヒアリングの前日まで情報が入らなかった。学部からは、学部長、学部次長、獣医学科主任、家畜病院長、事務局長、事務長とワークシート作成とチェックに携わった渋谷教授と杉谷が最初の名刺交換に加わった。人事異動で事務長は研究事務課長から昇格された方であったが、事務局長は大学本部から移ってこられた方である。移動されたばかりだったので、実施の場では戸惑われたのではないかと推察する。

その後の協会側の打ち合わせの後、動物病院、臨床関連実習室、図書館等施設見学、授業見学、学生へのインタビュー、学生担当、学級担任及び学生課長との面談、大学関係者との面談等が昼食をはさんで行われ、9:00~18:00までのフルスケジュールで進行された。

大学関係者との面談では、学部長をはじめ執行部の先生方7名、事務局執行部5名、獣医学科の教授会のメンバー19名、事務局課長9名、合計40名が対応をした。「ワークシート」及び「提出資料」における内容についての細かな質疑応答がなされた。ワークシートに記載されない部分の説明や解釈の相違については、この時点で補うことができた。ここでも人事異動で部外から異動されて来られたばかりの課長が2名含まれている。

生物資源科学部としては評価委員の先生をゲストと考えていたようで、食事やタクシーなどの手配にも気を遣われていた。しかし、評価はピュアに行われるものなので、タクシーの手配も要らず、食事は1500円以下のお弁当を準備して、基準協会が負担することとなっている。

#### 評価への懸念:

12月末に本学に対する「獣医学教育分科会報告書」 及び「評価結果(委員会案)」が届いた。この「評価結果(委員会案)」については、1か月以内に意 見申立を提出することが可能である。

評価の公表にあたっては、執行部の先生方には申 請の準備の時点から低い評価になるのではないかと 懸念があった。事項に問題がある場合は「勧告」と なり、3年後に提出する改善報告書に、指摘されるに至った経緯とその後の改善完了情況を報告せねばならないからである。一方、獣医学科の教員からは、できるだけ厳しい目で客観的に評価をしてもらいたいという気持ちがあった。評価項目に「勧告」となれば学部としても早急に改善しなくてはならないことから、実際の教育現場の状況を記載したい気持が強くあった。そのため、いくつかの項目においては自己点検・評価としては最低の評価を記載した。しかし、頂いた評価結果からは、「勧告」は一つしかなく、自己評価よりいい評価を頂いてしまったものが多く、この企てはあまりうまくいかなかった。結果として、学部の懸念した件は殆ど払拭されたものとなった。

獣医学科が評価を心配した点は、教員の数が極め て少ないことである。以前は国家試験の科目が18科 目であり、それに対応して各3名ずつの教員数を基 にした54名というのが学部の方針であった。これに は学部助手という学科事務を手伝うスタッフの数も 含まれたものであっが、少しでもその数に近づける ことを予定していた。しかし、前述したように、学 生定員の厳格化による収入減が影響して、大学本 部より教員人数の増員は凍結されてしまった。ワー クシート作成時には48名しか教員がいない状況であ り、さらに、その中には助手も含まれていた。以前、 大学には助手というポストがあったが、学校教育法 の一部改正により2007年4月からは助手と助教に分 けられ、助手は教員のポストから外されている。し かし、本学部においては未だに助手というポストが 残っており、実習における重要なスタッフとなって いる。しかし、基準協会の規定は文部科学省の考え 方を基本にしており、ワークシートには専任教員と しては記載ができないため、46名が専任教員となる。

また、本学部には特任教授というポジションがあり、3名がこれにあたる。特任教員も基準協会の定義と異なっており、少し混乱した。本学部の規定では特任教授は専任教員から外されている。しかし、基準協会の規定では、モデル・コア・カリキュラム科目に相当する科目につき総時間数の2/3を超える時間数を担当している者という定義がある。特任教授はこれにあてはまっていたので、記載が可能で

あったため、とりあえず46名が専任教員と考えることができた。

教員数に関しては、女性教員数も問われるが、これも少ない。「勧告」にはなっていないが、教員構成に関してはどこの大学においても課題として残るのではないだろうか。

もう一つ施設に関しても評価が心配であった。今 まで小動物臨床に特化した教育を行ってきた経緯が あるため、産業動物臨床関連が弱い。施設の老朽化 が進んでいる箇所もあり、また、診療施設がない状 況である。施設の改修や新設に関しては、学部とし ていろいろと補助をして頂いているが、学部だけの 力ではどうにもならず、大学本部の決裁が必要とな る。こればかりはいかんともしがたく、この点も大 きな課題として残されている。

#### 今後:

第三者評価を受けることの意味は何か、と考える ことがとても重要と考える。多忙な毎日の中では、 どうしても評価の資料を作成した、評価がなされ た、勧告が無くてよかった、といったところで安堵 の気持ちが流れる。しかし、次に何をなすべきかを 考え、改善に向けた努力を惜しまないこと、すなわ ちPDCAサイクルを形成して進むための要素だと思 う。獣医学における分野別第三者評価は、獣医学教 育の質の充実と維持を目的に2012年に定められた獣 医学教育モデル・コア・カリキュラムに則った教育 を行っているかを評価するものである。しかし、既 にモデル・コア・カリキュラムの見直しや国際認証 取得に向けた取り組みなどが行われ初めていること から、最初の自己点検・評価のワークシートも見直 しがなされるのだろう。また、AIやIoT(Internet of Things)といった技術面での進歩が著しい中、時 代の流れに即した教育も余儀なくされるのだろう。 本獣医学科は、日本大学が有する16学部87学科の中 の一学科ではあるが、入学者の偏差値はトップクラ スの生徒を受け入れる学科である。今後も事情を加 味しながらも、教職員が一丸となって獣医学教育の 質をさらに充実・向上させる更なる努力のために、 今回の第三者評価の結果が活かされると信じてい る。

# 酪農学園大学における 獣医学教育の認証評価について

酪農学園大学 獣医学群獣医学類 教授 山下 和人 (獣医学類長)

本学では、獣医学教育に関する状況変化に対応するとともに本学獣医学群のあるべき20年後の理想像を設定することを目的に、2015年3月に「獣医学群改革基本方針2014」を策定した。現在、この改革基本方針に沿って教育改革を取り進めており、2018年度には公益財団法人大学基準協会による獣医学教育機関協会(EAEVE)による認証評価の事前審査(Consultative Visitation, CV)を受審する予定である。なお、本学では2007/2014年度に認証を受けた公益財団法人日本高等教育評価機構による大学機関別認証を2021年度に再受審する予定であり、2018~2022年度は3つの認証評価を次々と受審する過密なタイムスケジールとなっている。本稿では、獣医学教育の認証評価の受審体制等について概説する。

#### 1. 大学基準協会の獣医学教育認証評価の受審

2017年7月の本学評議会にて及川 伸獣医学群長 より獣医学類が大学基準協会による獣医学教育評価 を受審することが報告され、提出書類作成について 関係部署への協力が要請された。自己点検評価ワー クシートの作成は、第三者評価対応委員会(山下学 類長、寺岡宏樹教授、鈴木一由教授、学務課職員2 名)が担当した。この第三者評価対応委員会は関係 部署から全面的に協力を得て同年12月末までに自己 点検ワークシートの作成を完了し、2018年1月29日 に大学基準協会へ自己点検ワークシートならびに提 出資料一覧を事前提出した。その後、事前提出した 自己点検ワークシートに関して大学基準協会から受 けた指摘事項を追加修正し、2018年3月26日に自己 点検ワークシート、提出資料一覧、および提出資料 を大学基準協会へ本提出した。この時点で第三者評 価対応委員会は解散した。

大学基準協会による本学の獣医学教育評価の実地調査は2018年11月7日に実施された。本提出した自己点検ワークシートに対する回答および分科会報告書(案)に対する見解の作成ならびに実地調査への準備対応は、獣医学類運営協議会(山下学類長、田島誉士学類会議議長、岩野英知生体機能学分野長、大杉剛生感染病理学分野長、樋口豪紀衛生環境学分野長、中田健生産動物医療学分野長、上野博史伴侶動物医療学分野長)および学務部が担当した。実地調査には、大学基準協会から評価者3名および協会事務局職員2名が来学し、以下の日程で実施された。

9:40~10:30 評価者打ち合わせ

10:30~12:00 施設設備の見学

13:00~14:00 学生へのインタビュー

14:00~14:30 教職員との個別面談

14:30~16:30 大学関係者との面談

16:30~18:00 評価者打ち合わせ

#### 2. 大学基準協会の獣医学教育認証評価の結果

2018年12月21日に大学基準協会より、「本学獣医学類(学士課程)は獣医学教育に関する基準に適合している」との通知を頂いた。今回の獣医学教育認証評価において私たちの主な関心事は、①本学獣医学類の現行カリキュラムが獣医学モデル・モデル・コア・カリキュラムに適合しているか、②本学獣医学類の教員組織が大学基準協会の基準に適応しているかの二点であった。①に関しては、獣医学モデル・モデル・コア・カリキュラムに適応させるべく改定した2015年度入学生以降のカリキュラムが評価対象となったことから、【評価の視点2-6】「モデル・コア・カリキュラムの内容を網羅した講義内容であること」についての自己評価は「概ね対応している」と回答した。大学基準協会の評価も同様であった。

一方、②に関しては、専任教員数(54名)が大学 基準協会の基準(学生定員120名で専任教員77名) を大きく下回っていたことから、【評価の視点4-2】「専任教員を中心に、獣医学教育(学士課程) に必要な教員を確保していること」についての自己 評価は「60以上70%未満」と回答した。これに対し、 大学基準協会の評価は「専任教員数については、入 学定員120名に対する必要教員数77名の74%となる 57名(専任54名、兼担3名)と概ね適切である。」 であったことから、幾分驚きを隠せなかった。

今回の認証評価では、大学基準協会より獣医学教育に関する基準において以下の提言(特色、長所、検討課題、勧告)を頂いた。現在、この提言において指摘された検討課題について早急に対応すべく、 竹花一成学長を中心に対策が練られている。

#### 長所:

獣医学共用試験(vetOSCE)やスキルスラボに対応する臨床獣医学教育研究棟のほか、動物薬に関する教育研究、動物薬開発のための基礎・応用試験、臨床試験、相談、調査・検査業務等を行う動物薬教育研究センター、教員・学生の教育研究等に活用されている酪農学園フィールド教育研究センターなど、特徴ある附属施設を有している。

#### 特色:

- 1) 獣医師の資質を涵養するため、基盤教育において、学内の附属農場や関連施設を活用し、初歩的な技術を学びながら、食料と健康にわたる生命のつながりを体得することを目的に「健土健民入門実習」を必修科目として受講させている。
- 2) 獣医学教育におけるグローバル化推進に関して、文部科学省の世界展開力強化事業のもと、タイ・カセサート大学と単位互換教育が実施されている点は評価できる。

#### 検討課題:

- 1) 大学の目的をホームページ及び『大学案内』等に適切に掲載するよう、改善が望まれる。
- 2) 学位授与方針において、修得すべき知識・技能について記述するよう、改善が望まれる。
- 3) 教育課程の編成・実施方針において、教育課程の 体系や授業科目区分を示すよう、改善が望まれる。
- 4) 学位授与方針及び教育課程の編成・実施方針を

大学案内に掲載することが望まれる。

- 5)解剖学実習においては牛以外の動物種について、 病理学実習においてはすべての動物種について 適正な数を確保した実習の実施が望まれる。
- 6) 授業科目と学位授与方針との関連性を理解できるよう、また学生が授業科目を体系的に履修できるよう、カリキュラムマップやカリキュラムッリーを整備することが望まれる。
- 7)シラバスの成績評価基準の記載について、成績 評価基準が明確でない、あるいは記載がない科 目もあることから、改善が望まれる。
- 8) 履修規定の成績評価基準に基づき成績評価が行われているが、一部の科目で履修者全員がS評価となっていることから、より厳格な成績評価の実施が望まれる。
- 9) 学位授与方針に示された学習成果の達成度を把握・評価する方法が十分に構築されているとはいえないため、評価指標を開発、構築し、学生の学習成果の把握をもとにした教育改善に取り組むことが望まれる。
- 10) 学生受入方針において、入学前の学習歴・知識水 準・能力等の求める学生像や入学希望者に求める 水準の判定方法を定めるよう、改善が望まれる。
- 11) 教員採用時に、年齢や職位別教員数、全専任教 員に占める女性教員の割合の改善に留意するこ とが望まれる。
- 12) 動物実験施設として、検疫や疾病に罹患した動物のための隔離室が整備されていない点について、改善が望まれる。
- 13) 酪農学園フィールド教育研究センターなどの学内 の産業動物関連施設を活用し、産業動物獣医師 を対象とした卒後・生涯教育の実施が望まれる。
- 14)「自己点検・評価委員会」は認証評価の受審時に合わせての開催となっていることから、今後は自立的な教育の質保証体制を構築し、自己点検・評価の結果及び評価機関からの指摘を改善に結びつける仕組みを整備することが望まれる。
- 15) 獣医学教育課程に関するホームページにおいて 獣医学教育課程に関する情報量を充実させると ともに、頻繁に更新することが望まれる。

勧告:なし

#### 3. 欧州獣医学教育機関協会(EAEVE)の認証評価

本学では、2015年度より獣医学群組織検討委員 会 (委員長 田村 豊教授) にて獣医学教育の国際 認証評価に関する調査を進め、EAEVEの獣医学教 育認証評価に関する具体的な情報収集を開始した。 2017年度からは獣医学類の国際化検討委員会(委員 長 岩野教授)がEAEVEに関する情報収集と調査 を引き継ぎ、2017年5月に英国ロンドンで開催され たEAEVE総会に蒔田浩平准教授を派遣した。これ らの情報収集および調査結果を踏まえ、獣医学群で は同年8月の学群教授会にてEAEVE認証評価を受 審することを決定し、学群教員のコンセンサスを得 た。続いて、同年9月の大学評議会にてEAEVE認 証評価受審について審議し、大学として全学的に対 応することが決定された。その後、獣医学類の国際 化検討委員会で具体的なEAEVE認証評価受審への ロードマップと対応組織が検討され、2018年3月の 理事会にてEAEVE事務局へ獣医学教育認証評価の 受審を正式に申請することが承認された。

これらのEAEVE認証評価受診のコンセンサス形成と学内手続きを経て、2018年4月に自己点検評価専門委員会(委員長 照井俊秀副学長)が設置され、EAEVE認証評価の実務を担うチーム(EAEVE推進室)が結成された。EAEVE推進室の構成メンバーは、鈴木一由教授(室長、獣医学類)、能田 淳准教授(獣医学類)、吉中厚裕准教授(環境共生学類)、中辻浩喜教授(循環農学類、学類長)、学務課職員2名、および教務課職員1名であり、EAEVE認証評価の受審に対して全学的に対応する体制が整えられた。

2018年5月にドイツのハノーバーで開催された EAEVE総会には、竹花学長、山下学類長、鈴木 EAEVE推進室長、能田准教授、および蒔田教授(獣 医学類国際化検討委員会委員長)の5名が出席し、 EAEVE事務局の評価担当者2名と認証評価の標準 業務手順書(Standard Operating Procedure, SOP)、 CV実施日程等に関して協議した。その後、EAEVE 事務局より本学CV実施日程が2019年10月22~24日 に決定されたとの連絡があったが、2019年10月22日に 「即位礼正殿の儀」の開催が決定し国民の休日となっ たことから、EAEVE事務局に日程変更を打診し、最 終的に2019年10月28~30日に決定された。 これまでのEAEVE認証評価に関する情報収集ならびに調査では、先行してEAEVEによる獣医学教育の認証評価を受審している北海道大学・帯広畜産大学共同獣医学課程の稲葉 睦教授ならびに山口大学・鹿児島大学共同獣医学部の佐藤晃一教授をはじめとする各大学でEAEVE認証評価に対応されている先生方から多くの情報提供と示唆を頂いている。この場を借りて、各先生方に感謝の意を表したい。

現在、2019年8月にEAEVE事務局へ自己点検評価報告書(Self Evaluation Report, SER)を提出すべく、EAEVE推進室を中心にSERの作成作業を取り進めている。また、獣医学類では、2020年度カリキュラム改定を目標にEAEVE認証評価に対応するカリキュラム案を検討している。このEAEVE認証対応カリキュラムは、大学基準協会の獣医学教育認証評価で獣医学教育モデル・コア・カリキュラムに適応していると認定を頂いた現行カリキュラムをベースに、獣医保健看護学類との共通科目(専門基礎科目)を最大限設定するとともに、EAEVE認証評価で求められる参加型実習16単位(生産動物臨床8単位、伴侶動物臨床8単位)を5年次に設定することを計画している。

現状で、本学においてEAEVE認証評価の認定を 得るために解決すべき大きな課題には、本学附属動 物医療センターにおける365日24時間の診療体制の 構築、多様な動物種に対応する診療科の設置(馬診 療科、中小家畜診療科、エキゾチックアニマル診 療科など)、教育研究施設のバイオセキュリティ対 策などが挙げられる。とくに、EAEVE認証評価で 要求される診療体制の構築については、専任教員の 増員という私立大学の経営にも大きな影響を及ぼす 課題であり、労働基準の遵守や人件費に関わる財 源等も考慮して対応する必要がある。しかしなが ら、EAEVE認証評価で求められる獣医学教育の基 準では、大学基準協会による認証評価の場合よりも 具体的な実学的数値目標が設定されており、獣医学 教育の改善において明確な努力目標を示している。 EAEVE認証の取得は簡単に超えられるハードルで はないが、その認定を目指して獣医学教育の改善を 図ることによって学生に良質な国際水準の獣医学教 育を提供できることは間違いない。

# 2019年度受審に向けた北里大学の対応

北里大学 獣医学部獣医学科 教授 上野 俊治

わが国の獣医学教育改革の5本柱の一つと位置づけられている獣医学教育評価(外部評価)は、2017年度の麻布大学の受審に始まり、翌2018年度は日本大学、酪農学園大学が受審を終えている。北里大学では2019年度の受審をめざし、2018年9月より大学基準協会への提出資料の作成に着手した。この稿では、外部評価受審の準備段階における対応状況を紹介する。

まず、北里大学が2019年度に外部評価を受審する ことになった背景である。当獣医学科は20研究室で 構成され、基本的に教授、准教授または講師、助教 の3名体制を研究室の基本構成として人事計画を進 めている。従って、各職位における年齢構成のピー クが約10年ずつずれており、ある時期に達すると数 年内に多くの教授が定年に到達するという年齢構成 の偏りがある。具体的には当学科の現時点における 教授19名のうちの9名が、今後5年以内に定年退職 となる予定で、これから数年の間に多数の補充人事 や昇任人事が動き始め、組織が不安定化することが 予想される。そこで、現在の教育体制に関して外部 評価を受審して改善が必要な項目を明らかにして頂 き、当学科はそれらの指摘事項に早急に対応し、よ り安定した教育体制を構築しておこうという趣旨で ある。また、北里大学全体としては2016年度に大学 基準協会による外部評価を受審して評価をして頂い ているが、その受審用資料の作成過程に携わった教 員はごく一部に過ぎず、また今後数年内に退職を迎 える。今回の受審用の提出資料の作成にあたっては、 より多くの若い教員が資料作成を担当して、今後7 年ごとに繰り返される外部評価受審に対応できる人 材を養成することも目的の一つである。

提出資料作成の第一段階では、提出を求められる 「自己点検・評価ワークシート」の各評価項目ごと に担当教員の割り当てから作業を開始した。

評価の視点1の「使命・目的」に関しては、学科 長を取りまとめ役として、教育委員長およびカリ キュラム委員長に担当をお願いした。評価の視点2 の「教育課程・学習成果」に関しては、教育委員長 およびカリキュラム委員長を主たる担当者として、 解剖学実習・病理学実習担当教員、参加型臨床実習 担当教員ならびに教務課・学生課が資料作成を担当 した。評価の視点3の「学生の受け入れ」に関して は、学科長を主たる担当者として、学生課入試係に 補佐をお願いした。評価の視点4の「教員・教員組 織 に関しては、学科の系内教育検討委員会に所属 する教員(生体機構系7名、予防衛生系6名、臨床 系8名)が主たる担当者となり、教務課と総務課に 補佐をお願いした。評価の視点5の「学生支援」に 関しては、学生指導委員長を中心に学生課が資料作 成を担当した。評価の視点6の「教育研究等環境」 に関しては、獣医学科系内教育検討委員会の各系の 代表教員3名、実験動物委員会委員長、バイオセイ フティー委員会委員長、遺伝子組換え実験安全委員 会委員長、動物病院長、獣医学教育推進委員会(共 用試験担当) がそれぞれ関係項目の主たる担当者と なり、総務課に補佐をお願いした。評価の視点7の 「社会連携・社会貢献」に関しては、生涯学習委員 会(3名)、卒後教育委員会(3名)および総務課 が資料作成を担当した。評価の視点8の「点検・評 価、情報公開」に関しては、学科長をとりまとめ役 として、自己点検評価委員会、ホームページ実務委 員会、総務課が資料作成と担当した。

以上のような割り当ての下に2018年9月から資料 作成作業が開始され、10月末に原案の作成を終了し た。各担当から提出された原案は、学科長が全体を 取りまとめ、総務課、教務課および学生課によって 添付資料の収集と整理が行われた。

一方、北里大学は2009年度から大学基準協会による外部評価を大学全体として受けており、改善に取り組むべき事項として指摘された項目に対する改善等を行っている。このような大学全体としての外部評価は、その後も継続的に行われており、2016年度には2回目の外部評価を受審している。北里大学では外部評価に対応する事務組織として、教学本部に「点検・評価室」を設置しており、今回の獣医学教育評価に関する提出資料も、「点検・評価室」による細部に渡る点検・修正を受け、獣医学科の学科会の承認を得て提出資料を完成させる予定である。

北里大学の「自己点検・評価ワークシート」は、 現時点では未完であるが、その内容を評価の視点の 順番に沿ってご紹介する。

#### 評価の視点1:「使命・目的」

獣医学教育の目的は既に制定され、学部教育委員会で毎年点検をして全学教育委員会に報告している。その公表に関しても様々な方法で行っている。

#### 評価の視点2:「教育課程・学習効果」

ディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーの制定とその内容、これらに関する公表と周知等に関する問題点は見当たらなかった。また、教育課程の編成・実施方針に関しても、同様に問題は見いだせなかった。

北里大学の現行カリキュラムは、2012年度に示されたモデル・コア・カリキュラムに内容を全てカバーするものであることは既に確認されていたが、そのうち4科目で他大学教員2名と行政担当者数名の「兼任」教員が教育を担当している。これは、これらの科目の専門性や、より現場に則した教育を目指しての対応であり、特に問題視される事ではないと考える。実習に関しては、モデル・コア・カリキュラムに指定されている科目名に、北里大学で開講されている複数の実習科目が対応しており、実習のティーチング・アシスタントも延べ人数で45名と、当学科における実習がかなり手厚く行われていることが明らかとなった。時間割での講義と実習の配置であるが、座学で講義を受講した後に関連科目の実

習を受講するスタイルが全科目で実現されていた。 また、獣医師の資質を涵養するための科目・実例 に関しても様々な取組が実施されていた。

共用試験と参加型臨床実習に関しては、北里大学では5年次前期に受験する共用試験の受験資格として、4年次までに配当された必須科目の全単位取得を義務づけており、学内で厳しい事前評価を実施している。

死体を活用した解剖学教育は、8種類の動物に関する解剖学実習を行ってはいるものの、動物当たりの受講生数が多く、改善が必要と判断された。動物死体を活用した病理学教育に関しては、近年特にとり扱う動物数が少なく、何らかの改善策を考える必要がある。

当学の獣医学教育におけるアドバンスト講義・実習に分類される科目は18科目が開講されており、比較的多いと考えられる。また、卒業研究も、4年次後期から発表までの実質2年間が費やされて、その中の一部は学生が学会・研究会等で発表するなど、一定の水準を維持している。

インターンシップ等の実地研修は、4年次以降に「学外実習」として4単位を取得することが可能であり、その中には米国三大学(パデュー大学、ジョージア大学、テネシー大学)やマハナコン工科大学での海外研修も選択できるようにしてある。

カリキュラムツリー、カリキュラムマップは、理解しやすいように見直しが行われており、学生に周知されている。シラバスに関しても、電子シラバスの導入で、教員による修正を容易にし、学生が最新版を見ることができるようになっている。シラバスの改善に関しても、全学的に統一した作成指導がなされている。

成績評価に関しては、学生には公開していないが、 科目ごとに成績分布表を作成して、厳格・適正な評価が行われるようにしている。また、学生からの成績に係わる異議申立制度に関しては、現状では十分とは言えず、今後の対応が必要である。進級規定および卒業要件は明確にされており、学生に十分周知されている。また、全学的にアセスメント・ポリシーを新に設定することを2019年度に計画している。

次に「学習成果」であるが、各学年および卒業時

の成績優秀者の表彰制度が有り、各学年とも保証人 宛の成績通知が年に2回発送される。また、同一学 年内の成績順位が算出され、希望する学生にはクラ ス主任(教授)を通して情報を与えている。クラス 主任や所属研究室の主任教授は、成績不良者に対し て面談を行う一方、学生による授業評価を全科目に 関して実施して授業改善の参考としている。

獣医師国家試験合格率は6年前から若干低迷しているため、現在も様々な対策を行っている。具体的には定期試験期間を長く取り、学生が定期試験までに各科目の知識を整理する余裕を持たせること、6年次前期から成績不良者(下位15%)を集めて自習する時間を設けること、6年次後期の総合獣医学の講義期間を長く設定し、学生が各科目の知識を整理する時間を講義と講義の間に設けた等である。

卒業生の進路状況・活躍状況に関しては、現在対応していない卒業後の活躍状況の把握方法を今後検討する予定である。

#### 評価の視点3:「学生の受け入れ」

アドミッション・ポリシーが制定・公開されており、当獣医学科で実施されている7種類の入学試験ごとに、明確な入学者選抜方針が公表されている。当学科の入学者数は、定員のほぼ110%程度である。

#### 評価の視点4:「教員・教員組織」

学生が120名の場合の必要専任教員数とされる77名には及ばず、総数58名(選考中を含む)と75%に止まるので、今後増員する予定である。内訳は、導入・基礎分野が22.6%、病態分野20.8%、応用分野18.9%、臨床分野は小動物が26.4%、大動物が11.3%と基準範囲内にある。モデル・コア・カリキュラム科目およびアドバンスト科目の実施にあたり、専任教員が適正に配置されていると判定できる。また、全専任教員が獣医師であり、専門教育を担当するのにふさわしい研究業績または専門経験を有していることを確認した。

各職位における年齢構成を見ると、教授職では50歳代から60歳代にかけて分布ピークがあり、准教授・講師では40歳代、助教では30歳代でピークとなる。このような年齢構成は、1研究室に3世代の教員が一人ずつ所属する組織ではやむを得ないが、問題は教員の男女比である。女性教員は全体の6%に

あたる3名と極端に少ない。これまでに赴任に至らなかった女性の教員候補者は数名存在するが、地方にキャンパスを構えていることを理由として決断できなかった例も多い。当学科としては、引き続き女性教員を増やす努力をしてゆく所存である。

教員任用を行うための基準は、学部内で明文化されており、それに基づいて厳正に教員の採用や昇任が審査され、所定の手続きに従って審議・承認後に任用される。

各教員の講義や実習の負担を分析すると、講義や 実習の負担が過度と考えられる教員はほとんどいないが、一部にやや負担の大きい教員が見受けられ、 今後、教育や組織運営の負担の平準化を図るべく、 学内での役割分担を考慮してゆく必要がある。

FDの実施は、大学全体として行われるものと学部としておこなわれるものがあり、適切な実施体制の下に様々な内容のプログラムが用意されている。

#### 評価の視点5:「学生支援」

クラス主任制度による学年ごとの教員によるケ ア、懇話会(教員が2~4年までの各学年の3~4 名の学生を担当し、食事会等でコミュニケーション を取る) の開催を通して、勉学から私生活に至る相 談に乗るシステムが動いているほかに、学生相談室 (女性カウンセラー2名) によるメンタルケア、精 神科校医制度による健康相談、事務室学生課による 学生の要望への対応等を行っている。学習面では、 学生が1年次を過ごす相模原キャンパスに「一般教 育学部サポートセンター (ASC)」を設置し、英語・ 数学・物理・化学・生物の5科目を高校で教鞭を執っ ていた元教員がチューターとして(各科目に2~3 名を配置・輪番制) マンツーマン方式で指導し、高 校で十分に学習できなかった科目を大学の講義と関 連付けて支援している。2年次以降に関しては、国 家試験合格率の上昇をめざし前述の対応を行ってい る他、構内の一部を学生達に開放して、学内で自主 勉強ができる環境を与えている。また、障害を持っ た学生への対応も可能である。

就学途中で家庭の事情の変化によって、経済的に 困難になった学生への支援としての給付型・貸与型 奨学金も複数用意されている。また、「人権侵害(ハ ラスメント)防止のためのガイドライン(指針)」 を策定し、教職員に周知を図っている他、学生が人権侵害等を相談、さらには申し立てを行うシステムも整備され、適切に運営されている。学生の進路支援に関する取組としては、全学としての活動や学部単位での活動が実施されている。

#### 評価の視点6:「教育研究等環境」

平成26年に獣医学部本館A棟とB棟を新築し、講義室、実習室、一部研究室の設備を一新した。また、平成20年に動物病院を新築し、小動物診療設備の充実を図るとともに、平成29年より実験動物飼育設備の改築と、実験動物管理方式の刷新と実験動物飼養規則の厳格化が行われている。病原体等の利用・管理、遺伝子組換え実験についても、国際基準に則った規則に従って厳格に管理・運用されている。

附属獣医学教育病院の施設・設備に関しては、今回の自己点検・評価ワークシートの中で必須項目や任意項目として表示されたもののほとんどに対応しているが、必須項目で2項目、任意項目で1項目が未対応なので今後対応してゆく。病院のスタッフに関しては、薬剤師の新規採用、診療スタッフの負担軽減が今後の課題である。また、附属獣医学教育病院を利用した参加型臨床実習に関しては、学生による症例発表会とこれに係わる教員やスタッフとの討論の部分が貧弱なので、今後充実を図る必要がある。

本学部には十和田キャンパスに附属農場、北海道に附属八雲牧場があるが、当獣医学科の教育に十分活かされているとは言えない状況にある。現在、大動物診療センターと十和田農場を改修する計画が進行中で、今後、より効率の良い運用形態に改良してゆく予定である。

研究倫理や研究・診療活動の不正防止に関する適 切な組織、研究倫理や研究・診療活動の不正防止に 関する取り組みに関しては、北里大学全体としての 十分な取組が行われている。

学生の海外派遣は、毎年20~30名の学生を米国、タイの協定大学に派遣している。このうち米国の3大学との交流は1994年から継続して実施されており、これまでに北里大学から524名の学生が協定校で臨床研修を受講し、逆に協定校からは60名の教員が当学を訪れ、講義・実習等を担当している。また、タイや中国から毎年複数名の研修生や留学生を受け

入れている。

#### 評価の視点7:「社会連携・社会貢献」

獣医師を対象に行った学術講習、研修等は基準を満たす頻度で開催されているが、地域獣医師対象のセミナーの開催が少ないので、現在、獣医学科のセミナー委員会が主催して開催している獣医学科セミナーの中で、地域で働いている獣医師が興味を持つようなテーマのセミナーが企画された際には、地域獣医師に参加案内を出すことを計画している。一方、一般市民を対象とした公開講座等は頻繁に催されている。

#### 評価の視点8:「点検・評価、情報公開 |

全学的には北里大学自己点検・評価委員会や北里 大学点検・評価室による教育・研究等の評価が継続 的に行われている。学部レベルでは、獣医学部自己 点検・評価委員会が設置されており、学生による授 業評価結果の分析および各教員による自己点検評価 票の集計・分析が毎年実施されている。これらの分 析結果は、各教員に情報が還元され、各教員の教育・ 研究活動の改善に活かされている。その他に教育改 善のための研修会やFD研修会も毎年複数回実施さ れて、ほぼ全ての教員が参加している。

第三者評価に関しては、前述したように2009年以降、北里大学として大学基準協会による教育評価を 受診して改善の努力を続けており、教育の質を担保 している。

以上、現時点での北里大学の自己点検・評価の概要を述べてきたが、自己点検・評価の段階で既に早急に対応すべきいくつかの項目が明らかになった。また、今回の提出資料作成作業に参加することによって、各教員の問題意識が芽生えたように感じている。2019年度の外部評価の受審では、専門委員の先生方に提出資料をご覧頂き現地視察をして頂くことで、内部の教員には気づけなかった問題点が明らかになるであろう。当獣医学科では、これまでも組織改善の試みが何度か行われてきたが、未だ目的を達成できていない取組もある。今回の外部評価で「勧告」や「検討課題」をご指摘頂く事で、対応の優先順位が自ずと明らかになるであろうし、逆に北里大学における教育課程の中で評価頂ける部分を教えて頂けるかも知れないと期待しているところである。

# 特集2 2020人献政革について

#### 2020年度入試改革に向けた対応

酪農学園大学 獣医学群獣医学類 教授 翁長 武紀

#### 2021年度入学者への北里大学獣医学部の入学試験

北里大学 獣医学部 教授 髙井 伸二

#### 日本獣医生命科学大学における入学試験の現状と課題

日本獣医生命科学大学 獣医学部獣医学科 教授 鈴木 浩悦

#### 2021年度入試改革に向けて

麻布大学 事務局教務部入試課 柳原新太郎 麻布大学 獣医学部獣医学科 教授 折戸 謙介

## 日本大学獣医学科入試状況について

日本大学 生物資源科学部獣医学科 教授 渋谷 久

# 2020年度入試改革に向けた対応

酪農学園大学 獣医学群獣医学類 教授 翁長 武紀 (入試広報センター長) 翁長 武紀

本学では2018年4月に大学入試部と学園広報室が統合され、新たに入試広報センターに改組されました。この組織統合はこれまで入試関連業務を担ってきた入試部と学園全体の広報を担ってきた広報室を再構築して連携・強化を図り、より効果的な入試広報業務を推進することを目的としていますが、同時に2020年度入試改革への対応が求められています。今回の特集ではこの入試改革に関する各大学の実施状況をテーマとしていますが、本学で実務を行う現場の率直な意見を述べたいと思います。

これまでにも様々な大学や受験業界の報道がある 中で、2015年に発表された「高大連携改革実行プラ ン」は果たして正しかったのか、という思いが常に 付きまとってきました。2020年度より思考力・判断 力・表現力を一層重視する「大学入学共通テスト」 に変わりますが、同時に英語の4技能測定が導入さ れます。しばらく猶予期間は与られていますが、高 校における英語教育は修正され、英語の4技能を高 める方向にシフトします。その必要性が本当にある のでしょうか。使う必要があれば人は学ぶ。それが 基本ではないのか。実際英語を必要とする人は強要 されなくても学んできました。ある程度の語学力の 修得の必要性は分かりますが、それならCEFRの一 定レベルを受験資格にすればよかったのであって、 センター試験自体を変える必要があったのでしょう か。記述式試験は本来、国立大学の2次試験や私学 で課されるものではなかったのか。色々と改革への 疑問は尽きませんが、本学も地方の小規模私立大と して改革に巻き込まれつつあります。そこで高大連 携プランを受け入れながら、どうすれば全ての改革 事項に対応できるかを考えてみました。

また、2015年以降に思考力・判断力・表現力とい

う言葉がよく出てきますが、ある程度の知識や経験を持たないと人は正しい思考も判断もしようがありません。いわゆる知識重視型教育はやらざるを得ない。そこから目を背けては現代の複雑な社会、科学技術は成り立たちません。その点において従来の大学センター試験はそれなりに機能してきたと思います。そして一定レベルの基礎学力を持った学生が大学で自主的に学ぶことで考える力や、創造力を身につけてきたのではないでしょうか。過去の日本の教育がさほど誤っていないことは、それなりの科学技術力を発展させてきた歴史をみればわかります。

実際2005~2008年には「知識基盤社会」という言葉がOECD科学技術政策委員会や中教審の文書に出てきます。当時は知識基盤社会を「知識が社会経済の発展を駆動する基本的な要素となる社会を指す」と定義し、「我が国の高等教育の将来像」という答申では「21世紀は知識基盤社会の時代である」と提言しました。知識基盤社会が持続的な成長と雇用を生む原動力となるという考え方です。

最初に知識基盤社会や生涯教育を重視したのは 北欧諸国であり、その結果北欧諸国はOECDの学 習到達度調査(PISA)で優秀な成績を取りました。 その成果は世界の教育界で注目され、OECDの生 涯教育に向けたキーコンピテンシーが発表されまし た。日本からも多くの教育関係者が北欧見学に出向 き、教育改革本が出版され、それが2008年の学習指 導要領に反映されたように思います。欧州連合EU も同様に追従し、2011年には大学に対し高度且つ特 定領域の知識だけでなく、意思疎通・柔軟性・企業 精神という横断的技能をもつ修了者の育成を提言し ました。その後、本邦では2015年にアクティブラー ニングを掲げる高大連携改革実行プランが発表さ れ、自主的に課題を発見し、主体的かつ協働的にそれを解決する能力を養うよう提言されたのだと思います。しかし、OECDのキーコンピテンシーは本来生涯教育に求められている能力であり、今回はそれを高大連携および入試改革の中心に据えるようです。大学入試が変わらなければ、中高教育も変えられないという現実はあるにせよ、思考力・判断力・表現力の3技能の測定法も十分に確立されていない中で、導入を進めてよいものか疑問は残ります。

さて、本学は全国の獣医志望の受験生の母集団のうち、比較的低順位の学生を受け入れてきました。 実際170名程度の合格者を出しても入学するのは60 名前後であり、上位者は確実に国公立か他の私立獣 医大学を選んで行きます。しかし、それでも基本的 には学力試験で学生を合格させてきたので、獣医師 国家試験においては新卒で90%の平均合格率を維持 してきました。例え6年間の学生生活の途中で紆余 曲折があっても基本的な学びは身につけているの で、最後の頑張りがあれば国家試験の合格を勝ち取 れてきたのだと思います。

しかし、心配なのはこれからです。本学では推薦 入試の人数枠を13名から26名に増やし、さらに学士と 附属高校からの推薦に30名の枠を設定しました。つ まり、何らかの学力は測るものの最大60名を従来の 学力担保なしに入学させられます。これでは国家試 験の高い合格率という社会的信頼に答えられるか心 基ありません。本学では成績不良者に対して同一学 年を3度繰り返しても進級できないと除籍になるよう 学則を修正しました。また、最終学年の6年次後期 で専門科目を総復習する科目を設定し、その試験で 60%を取得できないと卒業見込みが立たず国家試験 に出願できなくなります。入学者を学力で担保できな い以上、国家試験の合格率を維持するための方策と してやむを得ない措置ですが、これらは獣医師養成 大学としての生き残りのための安全弁に過ぎません。

一方、現在およそ9500人いると推定される獣医志望受験生の母集団は18歳人口の減少により10年後には85%程度に減ります。母集団が縮小すると現在より成績下位の受験生も入学してくることになります。現在の獣医師国家試験合格率をいつまで維持できるか心配は尽きません。より優秀な学生を狙う争

奪戦が私立獣医大学間にますます激しくなるので しょう。

多くの私立大学が2020年度入試改革で入試の独自 性を維持する方向に向いたのとは異なり、本学は共 通テストの積極的な利用に踏み切りました。本学の 学力入試で共通テストの英語と数学を利用し、また 英語の民間試験を導入することにしました。2024年 には4技能を全面的に導入するとの指針から、当初 は英語の民間試験のみの実施を検討したのですが、 その方式を採用する他大学は中々出て来ません。さ らに、9月以降の報道では民間試験を利用せず、出 願基準の設定に止まる大学が増えたことや、民間試 験の受験数が予想より少ないという情報もあり、志 願者数の減少に配慮して全面導入に踏み切れません でした。一方、各種の民間試験はCEFRに基づいた 比較表はあるものの、共通テストの英語と併用して 比較する事への疑問も残ったことから、最終的には 共通テストの英語の試験の得点に、民間試験の取得 レベルに基づいて加点する方式を採用することにし ました。今後2024年度までの過度期に志願者がどれ くらい英語の外部民間試験を受験し、それが志願者 数にどれくらい影響するかを見守るしかありません。

さらに、従来でも大学入試センター利用の英数理 3科目型の入試を設定してきましたが、今回共通テスト利用型では5科目型を設定し、両方の方式で上位の得点者から合格させるという方式を採用しました。これはいわゆる私立理系型受験を得意とする生徒だけでなく、高校で文系型の科目を履修していた生徒や、万遍なく優秀な成績を取れる生徒に志願しやすくしたものです。

さらに、学力試験では300満点で2%に当たる6点(600点では12点)の調査書点を加えることにしました。これは合格者の大部分は学力試験の成績で決まりますが、合格基準点辺りの受験生の中では高校における諸活動が評価されて順位の逆転が起こる程度であり、基本は学力評価重視であることに変わりはありません。しかし、主体性を測る点は満たしています。

これらの改革が2年後にどのような結果を本学に もたらすか、少しの期待と大きな不安の混じった中 でより具体的な設定を検討しているところです。

# 2021年度入学者への 北里大学獣医学部の入学試験

北里大学 獣医学部 教授 髙井 伸二

2021年度入学者から、これまでのセンター試験が 「大学入学共通テスト」に代わる。2018年11月には2 回目のプレテストが10万人規模で実施され(実際の 参加者は、欠席者が多く、少なかったが)、本校でも 高校2年生のトライアルを受け入れた。これまでのセ ンター試験に比べ、国語が80分から100分、数学が60 分から70分と、記述式の回答となり、長くなった。問 題も拝見したが、国語の本質というよりも、情報を整 理し、比較検討するような技巧に走ったような印象を 受けた。情報化社会の処理能力ということであろうか。 河合塾の全統模試記述式は、高校3年生でも3回実 施されており、その記述式との差別化で、あのような 問題になるのでしょうか?更に、記述の採点は無理が あるのでは。全統模試記述式(20万人規模)では試 験から成績発表まで3ヶ月を要しています。いずれに せよ、全国レベルで記述式を短期間に実施するという 無謀な発想はどこから生まれたのか?全くもって分か りません。受験産業の活性化でしょうか。これまでの センター試験は歴史を重ね、リスニング以外は洗練さ れた良い試験になってきたと感じていました。さて、 このようにぼやいても、2021年度入学者への入試から、 「大学入学共通テスト」が始まりますので、それをセ ンター試験の代わりとして受け入れざるを得ません。 本学部では、以下の様な入学試験を考えております。

- ○指定校推薦入試 定員25名
- ○公募制推薦入試 定員15名
- ○選抜入試(前期)定員50名
- ○選抜入試(後期)定員10名
- ○大学入学共通テスト利用試験 定員20名
- ○帰国子女特別選抜入試 若干名
- ○地域枠特別選抜入試 若干名
- ○学士入学試験 若干名

尚、定員数は現時点であり、変更の可能性があり ます。

それぞれの入試には、それぞれの意味があります。 ある一定以上の学力集団を形成する場合、その集め 方として、出来る限り、多様な人材を受け入れるこ とにより、卒後の獣医療・獣医事・獣医学研究・そ の他の分野に対して幅広い人材供給を可能にするの ではないかと考えられるからです。しかし、6年間 の獣医学教育により、その多様性は逆に均一になる ということも確かですが・・

さて、ゆとり世代が入学した頃、大学教育の危機が叫ばれていました。私たちも、まさかとは思いましたが、現実のものとして、国家試験合格率の低下に、その教育の成果が現れたと思いました。獣医師国家試験も、他の試験と同様に、その情報量の多さから、最後は丸暗記(詰め込み)での勉強も必要となります。その昔から、国試直前の1ヶ月で、緊張感もストレスも最大となり、低空飛行の学生でも、そこを乗り切って合格というパターンがありました。ところが、ゆとり世代となると、国試1ヶ月前になってもラストスパートが掛からない、その時点で諦めるという雰囲気が漂い、端から見ていても、そこでゲームセットと感じるようになりました。

そこで、選抜入学試験・センター利用入試で多くの学生を確保するという戦略から、公募制推薦入試で、高校時代の学業成績と他の活動などを評価し、最後まで真面目に学業に専念するタイプを選抜する方針を打ち出しました。ところが、応募資格を1浪まで可としましたので、1年間のアドバンテージが学力に反映し、合格者の大半は1浪となり、推薦入試の本来の意図するところが消えました。そこで、公募制入試をA方式(現役)とB方式(従来型)と

別け、それぞれの特色を出す方式と変更しました。

これは、私学の入試担当者の共通の悩みですが、 選抜入試の合格者においては、最後まで入学者数が 読めません。従って、多めの合格と補欠を出し、3 月からは辞退の出る度に繰り上げ合格を出しながら の定員確保となります。年によっては、最初の合格 者における入学手続き者の割合が異常に多い場合が あり、定員をかなりオーバーすることもありました。 そこで、次に、選抜入学試験を前期(2月1日)と 後期(3月初旬)に別け、入学定員の管理が容易に 出来るような入試体制へと変えていきました。これ も本質的な問題というよりも、定員管理が文科省に より強化され、アメとムチのように利用されている 現実への対応策でした。特に、大学内で、新たな改 組を実施する場合、他の学部の定員管理がその申請 に影響するという仕組みになっており、入学者数の 間違いが許されない、胃が痛くなる状況です。

入学試験問題は、どのような学生に入学して欲しいかという大学からのメッセージでもあり、独自問題を作成していますが、昨今の入試問題ミスによるトラブルなど、出題者の負担が極めて大きく、入試問題の作成には大変苦慮している現実もあります。問題は学内での精査に加えて、学外での事前精査、事後精査と万全を期しています。受験生の一生を左右する試験であり、やり過ぎはないと思われます。

地域枠入試が4年前から始まりました。第一号は 北里大学でした。現在、3名の入学者がおりますが、 地域枠の利点はまだまだ生かされていないと思われ ます。わが国の畜産地帯である九州・北海道・東北 など、獣医師が必要な地域には重点的に地域枠が利 用されるよう、地方自治体には考えてもらいたいも のです。地域枠の実用的な方策をひとつ提案したい。 国家試験合格6年生を対象に、地方自治体は学生支 援機構の奨学金を肩代わりして返済することで地方 に採用する仕組みは、奨学金貸与学生にとっても、 現行の地域枠の方式よりもリスク(進級・卒業)が 無く、更に、出身地に関係なく採用することができ るので、在籍者が少ない自治体には検討願いたい。

本学でも2年前から、指定校推薦入試を開始しま した。これは、公募制推薦入試とは、更に別の切り 口で、全国から広く多様な学生に入学してもらいた いと考えたからです。本学・医学・薬学部に於いて も入学実績がある高校に対して指定校をお願いしま したが、利用される高校の様子を見ながら、全国に 広げたいと考えております。

さて、センター試験利用入試は、早い段階から利用 してきました。以前は、選抜入試と同じ3科目型(数 学・英語・理科)でしたが、5教科7科目型の、所謂 国立型に対応した受験生にも入学してもらいたいと考 え、二つのセンター入試利用試験を行ってきました。 この試験は、ある意味では、他大学の滑り止め的な位 置づけもあり、更にセンター入試の科目別難易度の毎 年の波に影響を受けるのか、合格者数は変わらないよ うに出していますが、入学者数は年によって変動しま す。これまでは、1月第3週の土日に実施され、2月4 日頃から成績が提供されておりましたが、2021年の「大 学入学共通テスト」からは、試験結果が各大学に提供 される時期が~2週間ほど長くなるとのこと。これまで、 前期選抜試験と同じ日に合格発表(2月9日)してお りましたが、「大学入学共通テスト」利用試験では、2 月中旬以降になり、合格者数そして入学者の歩留まり など極めて予想が難しくなり、「大学入学共通テスト」 利用試験定員数を少なくして、影響を最小限に留める ことになります。これは、受験生にとってもメリットは 少ない試験となり、大学にとってはリスクのより高い、 利用しづらい試験となるような気がします。これまで センター試験を利用した大学が「大学入学共通テスト」 を取り止めるのも、この辺りが原因でしょう。

入学試験は、獣医師として様々な領域での活躍を期待し、「獣医師のたまご」としての適性を持つ受験生をどのように選ぶか、どのように見抜くかにあります。種々の推薦入試では面接を実施しますが、短時間の面接で人柄やコミュニケーション能力、自己鍛錬力などを推し量るのは極めて難しいというのが現実です。逆に、面接があれば入学出来なかっただろうと思われる学生にも出会いますが、これは面接のない一般入試・センター入試合格者です。これまでに述べた入学試験には一長一短があり、理想的な選抜方法を確立するには、これからも試行錯誤が続くものと思われます。最後に、本学では性別による合否判定の操作は一切行っておりません。欧米のように、女性の主たる職種となる日も近いか?!

# 日本獣医生命科学大学における 入学試験の現状と課題

日本獣医生命科学大学 獣医学部獣医学科 教授 鈴木 浩悦

大学の使命は大学教育を通じて有能な人材を社会 に送り出すことである。そのために大学は明確なディ プロマポリシー(DP、学位授与方針)を設定し、そ れを達成するためのカリキュラムポリシー(CP、教 育編成方針)に基づいた教育を行う。さらに、教育 を受ける側も共通した目的意識と各大学のカリキュラ ムにおいて能力を伸ばすことのできる素地を備えて いる必要があるため、アドミッションポリシー(AP、 入学者受入方針)は各大学のDPおよびCPに基づい て設定され、受験生に対してわかりやすく提示される。 各大学のAPは基本的には学力の三要素「知識・技能」 「思考力・判断力・表現力」「主体性を持ち、多様な人々 と協働しつつ学習する態度(主体性・多様性・協働性)」 を念頭に定めることが求められ、入学試験はAPを踏 まえて行われる。入試改革は3ポリシーの設定と明確 化を促進してきた大学教育改革の最終段階として捉 えられることもできる。

日本獣医生命科学大学の入学者選抜においては、 入学試験委員会と広報委員会がそれぞれ、運用と広 報に当たり、事務ではその両方を入試課が担当して いる。一方、入学試験結果の分析や、制度改革、方 針決定については、学長直下の大学戦略会議からの 指示を受けて入学試験委員会が対応に当たってい る。ここでは、本学のAPを踏まえた入学試験制度 を紹介し、現在の課題と取り組みについて述べる。

#### 1. 日本獣医生命科学大学の学部構成と教育理念

日本獣医生命科学大学は国内最初の私立獣医学校として明治14年に開学し、創立138年を迎える。現在、獣医学部(獣医学科と獣医保健看護学科)と応用生命科学部(動物科学科と食品科学科)の2学部4学科で毎年370名の学生を受け入れている。大学の教育

理念は「愛と科学の心を有する質の高い獣医師と専門職および研究者の育成」であり、学是「敬譲相和」の基に、生命科学、環境科学、食品科学の総合的な知と技を錬磨し、人間愛・動物愛の豊かで清冽な人材の育成を目指している。両学部は生命科学を基盤とするところで共通するものの、応用生命科学部が正常な動物の生産や生産物加工に基軸をおいているのに対して、獣医学部は動物の疾病に関する教育と、獣医師および動物看護師をはじめとする獣医療専門技術者の育成を念頭においている。このため、各学科はそれぞれのDP、CP、APを定めている。

#### 2. 獣医学科のAPと入学試験制度

本学獣医学科では、動物の診療や保健衛生の向上、 畜産業の発達、公衆衛生の向上に寄与する獣医師を 育成するために、「(1) 国際社会で活躍するために必要な基礎的英語力と獣医学を学ぶにあたり必要な数理的な知識を有する人、(2) 論理的思考力を有し、 自らの考えを簡潔に伝えることができる人、(3) 獣医師としての職務に関心・興味をもち獣医師として社会貢献を志す人、また、それを実行するための積極性と協調性を有する人、(4) 命あるものに愛情をもって接することができ、相手の立場に立つ思いやりをもつ高い倫理観を有する人」の4項目をAPとして公表している。AP(1) に関して、高校までに学ぶことを期待する教科として、英語、数学、理科(生物・化学)を挙げ、選抜方法もAPに明記している。

本学の獣医学科入学定員は私立獣医系大学の中では80名と少ないが、多様な学生を受け入れるために、幅広い入学試験区分を用意している。一般推薦入学試験は本学を第一志望とする高校3年生を対象に、評定平均3.5以上を条件とし、指定校推薦は行ってい

ない。推薦入学の定員枠内で、特別選抜入学試験(社 会人、帰国子女、IB取得者、獣医師後継者育成、地 域獣医療支援、学士)を行っている。これらの試験 区分では、面接と小論文により評価しているが、面 接では調査書等の提出書類も参考にしている。また、 学士では通常の学力試験を行い、それ以外では基礎 的な問題による学力の確認(基礎学力検査)を行なっ ている。センター試験のみを利用する入学試験では、 国語、英語、数学、理科で合否を判定している。獣 医学科の第1回一般入学試験は、これまでセンター 試験(英語・数学)と独自試験問題(理科)による 併用方式で実施していたが、今年度から併用方式の 入学試験と独自試験問題(英語・数学・理科(生物 ないし化学)) のみの入学試験をそれぞれ他学科と同 日に実施する。これにより推薦・特別選抜入学試験 以外の受験生は、センター試験利用、センター試験 併用方式 (第1回)、独自試験方式 (第2・3回) の 最大4回の入学試験を受けることができる。さらに、 これらの試験区分を全学科で併願できるため、受験 生は受験のチャンスと選択肢が広がっている。

#### 3. 学力の三要素を踏まえた入学試験と課題

高大接続改革実行プランでは、各大学のAPに基づ き学力の三要素「知識・技能 | 「思考力・判断力・表現 力」「主体性・多様性・協働性」を踏まえた多面的・総 合的選抜方法を促進している。本学ではAP(1)「基 礎的英語力と数理的知識」が三要素の「知識・技能」に、 AP(2)「論理的思考力と伝える力」が「思考力・判断力・ 表現力」に、AP(3)「獣医師への関心・興味、社会貢献、 積極性と協調性」が「主体性・多様性・協働性」に相 応する。推薦・特別選抜入学試験では、小論文が本学 AP (2) (「思考力・表現力」)、面接がAP (3) (「主体 性・多様性・協働性」および「判断力」)並びにAP(4) 「命あるものへの愛情、思いやり、倫理観」、成績評価と 基礎学力検査(学士では学力検査)がAP(1)(「知識・ 技能」)の評価に相当する。一方、一般入学試験の学力 検査はいずれの科目も記述式であるため、AP(1)(「知 識・技能」)およびAP(2)(「思考力・判断力・表現力」) の評価に相当すると考えられるが、現在数学と理科にお いてAP(2)「表現力」を問う問題の作成を検討している。 高大接続改革実行プランの主旨に基づけば、受験生

る。これは全入試区分に適用されるため、一般入学試 験でもAP(3)とAP(4)の「主体性・多様性・協働性 | を評価する必要がある。これについては、何を(調査 書や活動報告書)、どの様に(評価項目)、どの程度(配点) 評価するかを検討している。また、本学獣医学科では 2021年度から「センター試験」に代わる「共通テスト」 を利用した入学試験を予定している。共通テストのみ の入学試験では、英語、数学、理科(生物・化学・物 理から1科目)の3教科型か、国語、英語、数学、理 科(生物・化学・物理から2科目)の5教科型を選択(併 願)できるようにする。記述式問題が導入される国語・ 数学については、その部分の成績の利用を検討してい る。英語4技能「読む」「聞く」「話す」「書く」の評価 について、外部検定試験の活用を検討している。さらに、 獣医師後継者育成をAO入試として実施することを検 討している。

はAPに基づく三要素を総合的に評価されるべきであ

#### 4. 学生アンケート

本学獣医学科の学生に対するアンケート調査では、 推薦・特別選抜入学試験で合格した学生は、本学の 学是、教育理念、APを知っているのに対して、一般 入学試験で合格した学生はそれらをあまり認識して いなかった。一方、学生の自己診断ではあるが、「論 理的思考力、伝える能力、協調性、積極性があるか」 という質問に対して、推薦・特別選抜試験と一般入 学試験の合格者の間で回答に大きな相違はなかった。 さらに、入学試験区分に関係なくほとんどの学生が、 命あるものに対する愛情や相手の立場に立つ思いや りを「ある」ないし「少しはある」と回答した。

本稿の主旨とは矛盾するが、獣医学科1年生と接して感じることは、獣医師を目指して努力し、受験を勝ち抜いた学生の多くは、入試区分と関係なく、「獣医師の職務に対する興味、生き物に対する愛情、通常の積極性や協調性」といった素養を持っていると言うことである。これは高校までの教育である程度の学力水準に達する生徒に、学力の三要素が身についていることを反映しているのかもしれない。一方、獣医師の職務を考えると、その様な素養は不可欠であるから、医学部の様な面接や適性検査は別の意味合で導入を検討すべきものなのかもしれない。

# 2021年度入試改革に向けて

麻布大学 事務局教務部入試課 (入試課長)

柳原新太郎

麻布大学 獣医学部獣医学科 教授 (獣医学科長)

折戸 謙介

## 大学入学者選抜実施要項の見直しに係る改正点

高大接続改革については、「教育再生実行会議第四次提言(平成25年10月)」、「中教審答申(平成26年12月)」を踏まえ、「高大接続改革実行プラン(平成27年1月)」が策定され、これに基づき、「高大接続システム改革会議」において最終報告(平成28年3月)がまとめられた。文部科学省ではこの最終報告を踏まえ、「2021年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告(平成29年7月)」を決定し、以下の改正点を示した。

- ①最終報告を踏まえ、各大学の入学者選抜において、 卒業認定・学位授与の方針、教育課程編成・実施の 方針を踏まえた入学者受入れの方針に基づき、「学力 3要素」(「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主 体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」)を多 面的・総合的に評価するものへと改善する。
- ②その際、大学入学者選抜実施要項(以下「実施要項」という。)の「一般入試」「AO入試」「推薦入試」 の在り方を見直し、高大接続システム改革の趣旨を 踏まえた新たなルールを構築する。
- ③その際、高等学校教育への影響等を考慮する観点から、入学者選抜のプロセス(出願時期、実施時期、合格発表時期)について、基準を設ける。
- ④入試区分については、多面的・総合的な評価の観点からの改善を図りつつ、各々の入学者選抜としての特性をより明確にする観点から、次のように変更する。
  - ·「一般入試」**→**「一般選抜」
  - ·「AO入試」→「総合型選抜」
  - 「推薦入試」→「学校推薦型選抜」

以上の改正点に基づき、各々の大学において、入 試制度改革に取り組むこととなった。

## 本学の「入試課」組織変遷

入試業務と広報業務は関連性が高いので、「入試広報課」や「入学センター」という単一組織で業務を行っている大学が多い。

本学も経営企画課の事務分掌であった「広報に関する事項」と学務課の事務分掌であった「入試に関する事項」を学生募集、志願者確保等の観点から一元化した方が合理的・能率的であるということから、2010年11月に入試・広報課となった。

その後、大学の「広報 | という業務は、学生募集、 志願者確保のためだけではなく、大学の存在意義、社 会的使命である「教育活動・研究活動・社会貢献活動」 等について、様々な情報伝達手段を駆使し(大学ホー ムページ、SNS、紙媒体、各種メディア、プレスリリー スなど) ステークホルダーに向けて絶えず情報発信し 続けていく、という従来の広報業務の在り方とは、質 的にも量的にも様変わりしてきたことを受け、組織の 見直しを図った。「学生募集、広報機能の強化」のみ ならず附属高等学校も含めた麻布獣医学園全体の広報 活動及びブランディング機能のより一層の強化を図る という観点から、また、広報活動により各種フェアや オープンキャンパス等で普段から志願者と接触が多い 職員がそのまま入学者選抜業務に当たることについて も、社会から疑念の目を持たれる可能性も否定できな いという観点から、広報業務に当たる職員と入学者選 抜業務に当たる職員を明確にセパレートした方が良い ということとなり、平成28年10月に再度「入試課」と 「広報課」をそれぞれ独立した組織に分けることとした。 当然ではあるが、入試課と広報課では、密にコミュニ ケーションを取りながら日々業務に当たっている。

現在の入試課の構成員は、課長1人・職員3人・派遣職員1人の計5人である。年度初めの入試要項の作成、広報課職員と連携を取りながら志願者への広報活動(高校訪問、予備校訪問、各種相談会での対応)、入試問題の作成管理、Web出願サイトの管理、入試選抜業務の実施、入学者納入金の管理、入学者定員の管理(補欠繰り上げ業務)の他、2021年度入試改革に向けた検討等の業務を行っている。

#### 2021年度入試改革への検討

文部科学省からの大学入学者選抜実施要項の見直 しに係る予告に基づき、本学においてもどのような入 試制度にしていくか、世間の入試制度改革の気運が 高まり始めた2017年頃から検討を開始した。

まず、本学が単独で新たな入試制度を検討すること はあまりに危険であるという考えの下、本学が打ち出し た方針が他大学と比べて、時流とかけ離れたものになっ ていないか、等を含め外部からのチェックが必要と考 え、以前からお付き合いのあった株式会社駿台教育研 究所(以下「駿台」という。)にご協力願うこととした。

駿台には、入学者選抜方針に関わる提言の他、教職員を対象としたSD研修会の実施(年2回程度実施)、国の動向、国公私立大学の入試制度改革の進捗状況、及び高等学校から見た入試制度改革への意識調査等の情報収集をお願いしている。

特にSD研修会は、日本各地での講演会のほか、新聞、雑誌への掲載記事も多く、各シンポジウムのパネリスト等も務められ、大学受験界におけるご意見番ともいえる「石原賢一 進学情報事業部長」に毎回ご登壇いただいている。まず5月頃のSD研修会では終わったばかりの全大学入試結果の概況速報や本学の入試結果の分析をご報告いただき、また秋頃のSD研修会では、最新の模試動向を踏まえ、受験生のトレンド、及び高大接続改革の最新情報をご披露いただいたりしている。本SD研修会には、大学教職員のみならず、附属高校教諭や本学の高大連携校であるいくつかの近隣の高等学校教諭も参加している。

このように、国の動向や他大学の入試制度改革にも アンテナを常に張っているほか、受験生の模試データ 等の圧倒的な情報量を持つ駿台のサポートを得ながら、 本学の入試制度改革がトレンドから乖離したものになっ ていないか都度チェックしてもらう体制を整えている。

この他に、個人的にとても心強く感じ、またとても 重要視していることとして、私獣協のいくつかの入試 課の方々と個々に情報交換させていただいていること である。受験生は1人であっても、私立5獣医を受験 する者がほとんどであることから、それぞれの大学が あまりにかけ離れた入試制度を導入してしまうと、受 験生に対して大変負担が大きいものになってしまう。 「競争と協調」という私獣協の合言葉にもあるとおり、 このような入試制度の変革期においては、受験生負 担の軽減という観点から「協調」という点は、特に重 要であろうと考えている。

情報交換させていただいた中で特に印象的で心に 留めていることとして、「現高1生は自分たちが受験 する入試はどういう試験内容になるのか、とても不安 がって聞いてくる。だから、まずは安心させることを 念頭に置いて対応している。つまり現行の入試とそう 大きくは変わらない、ということを伝えている。」と いう言葉であった。正にそのとおりで、受験生は夢と 希望を持って大学に入学してくる。人生を掛けてチャ レンジしてくる入学試験がどのようなものになるの か、不安を抱いて当然である。受験生の不安をまず は払拭できるような入試制度改革内容と早めの情報 開示を心掛けていきたい。

#### 本学の2021年度入学試験の基本方針について

本学では、前述の「先ずは受験生に安心してもらう」 を念頭に①2020年度入試受験者と②2021年度入試受 験者で分けて、2018年末に情報開示した。

①については(細かなマイチェンはあるが)ほぼ本 年度入試と変わらない旨を伝え、②については、次 頁の内容で情報開示したので、参照願いたい。

特に今後本学で最も議論しなければならないと思っているのが【3】学力の3要素の評価・調査書等の活用についてである。既に早稲田大、上智大、青山学院大は、出願時に学力3要素の成果・経験の提出は求めるが、点数化しない旨を公表している。本学も数千人規模の一般入試において、調査書の内容をどのように合否判定に活用するのかしないのか、しないのであればどのように学力3要素を測るのか検討していかなければならないと考えている。

2018年12月27日 麻布大学

# 2021 年度大学入学者選抜(2021 年 4 月入学者対象)における基本方針について

麻布大学では、2021 年度入試(2021 年 4 月入学者対象)の大学入学者選抜において、両学部(獣医学部、 生命・環境科学部)とも、次のとおり変更することといたしました。

ただし、本内容は現時点のものであり、今後、変更となる可能性があります。今後は、この方針に基づいて、入試の詳細な選抜方法等を策定し、2019 年 8 月迄に公表する予定です。

#### 【1】入試区分名称の変更

入試区分名称について、次のとおり変更いたします。

変更前名称	変更後名称		
AO 入試(自己推薦型)	総合型選抜		
推薦入試(公募制·指定校)	学校推薦型選抜		
一般入試	一般選抜		

なお, その他「特別入試」の名称については, 決定次第, 公表いたします。

#### 【2】一般選抜において課す科目について

一般選抜で課す科目は、獣医学部では、2019年度入試(2018年度実施)から大きな変更は予定していません。生命・環境科学部では、現在検討中です。

#### 【3】学力の3要素の評価・調査書等の活用について

学力3要素を評価する観点から「調査書」等の活用を検討しています。いずれの試験区分も,具体的な活用方法については現在検討中です。決定次第,公表いたします。

• 一般選抜

「調査書」等の活用については, 現在検討中です。

· 総合型選抜, 学校推薦型選抜

「調査書・推薦書」及び「受験者本人が記載する資料」等の活用を検討しています。

#### 【4】大学入学共通テストの活用方法について

従来のセンター試験に代わる「大学入学共通テスト」の成績を利用した入学者選抜を実施します。詳細については,決定次第,公表します。

## 【5】英語の外部資格・検定試験を活用した入学者選抜について

英語の4技能(「読む」「聞く」「話す」「書く」)を適切に評価するために、入学者選抜の一部において、民間事業者が行う資格・検定試験のうち必要な水準及び要件を満たしていると大学入試センターが認定したもの(以下「認定試験」という。)の試験結果を、大学入試センターが提供する英語成績提供システム上から活用する予定です。

なお,認定試験の入学者選抜における具体的な活用方法については,今後,大学入試センターで認定される資格・検定試験の内容等を踏まえた上で,決定次第,公表いたします。

《 https://www.azabu-u.ac.jp/topics/2018/1227\_21242.html 》

# 日本大学獣医学科入試状況について

日本大学 生物資源科学部獣医学科 教授 渋谷 久

センター試験に代わり大学入学共通テストが実施されるなど、2020年度以降から大学入試が変わると言われている。日本大学生物資源科学部は、2018年度からセンター試験を廃止し、かわりにN方式という日本大学独自の入学者選抜を実施している。これは日本大学の全学部全学科において実施する統一入試で、学部・学科間併願だけでなく、同一学部内の複数学科への併願が可能な方式で、広範囲な学問領域を網羅し、同じ学問領域においても、多面的アプローチが可能な学部・学科を擁する日本大学だからできるメリットである。また、全国各地に試験場を開設するので、受験しやすい環境が整えられている。

日本大学においてN方式以外の入試は、各学部独 自の方式をとっている。生物資源科学部において、 一般選抜、いわゆる一般入試はA方式と言われ、半 月程の間隔で、1期と2期の2回実施する試験であ る。地方都市学生の受験者数獲得を期待して、本年 度から試験会場を7都市から17都市に拡大したが、 現時点で、1期の受験者数の増加は認められない。 獣医学科の試験教科は外国語、数学、理科の3科目 で、配点はそれぞれ100点、計300点を標準化得点と して算出し、合否を決定する。出題科目の見直しは、 入試改革の検討事項であり、本学においても課題の 一つである。国数理の3つの科目数は、多面的な判 断材料になるが、理科の選択科目として物理、化学、 生物のうちの1つのみの点数評価は、獣医学科のア ドミッションポリシーに沿う学生を評価するには、 情報不足と思われる。もちろん、多くの受験生が生 物学を選択するが、物理や化学を選択して入学する 学生もいることから、見直す必要があるかもしれな い。また文科省は入試改革で、一般選抜の項目には 思考力・判断力・表現力・主体性等の評価を推奨し

ているが、本学における現時点での一般選抜の評価 法は、学力試験のみである。

学校推薦型選抜、いわゆる推薦入試は、本学が重点を置いているところである。6年間という長い獣医学教育で、修学意欲を維持し続け、獣医師になるという目的を見失わない学生を選抜するには、高校3年間の履歴が非常に参考になる。

本学獣医学科の推薦入試は、日本大学付属高等学校からの推薦、いわゆる付属特別選抜とそれ以外の一般推薦がある。付属特別選抜は、日本大学のスケールメリットを生かした付属高校の推薦枠で、19校から優秀な学生を受け入れることができる。付属高校として接続・連携が密であり、多くの情報を共有できる点が利点である。また日本大学付属高等学校では、各年次で全学統一の基礎学力到達度テストを実施しており、受験者の学力を客観的に評価できる。また思考力・判断力・表現力等の能力や関心・意欲・態度・志向性などは、入学試験時の調査書、エッセイ、面接などが参考になり、多くの判断材料を与えてくれる。

一般推薦には公募制、関連産業後継者推薦そして 日本大学校友子女推薦がある。選考方法は書類審査、 基礎学力テスト及び面接で、これらを総合的に判定 する。推薦入試といえども、国語、数学、英語の学 力テストを課すことは、合否の判定で重要になって くる。申請要件の一つとして、高等学校の全体の評 定平均値が4.0以上を満たすこととあり、他の獣医 系大学に比べると比較的厳しい基準と考えられてい る。評定平均は高校内での評価であり、高校間での 相対的な評価は欠如している。したがって進学校の 4.0とそうでない高校との4.0では、受験生の学力に 大きな差が生じるのは当然である。その意味でも基 礎学力テストは、受験生全体の学力を絶対的に評価ができる。本年度、評定平均値を4.2から4.0に下げ、受験資格の枠を拡大したが、さらに修正すべきか、今後の検討課題である。

本稿の執筆中に、2018年度のA方式1期の受験者数が確定した。今年も100名以上の減少で、過去3年間、右肩下がりの現状を憂えている。獣医学科は、受験者数が減少したとは言え、一般入試1期と2期を合わせると千人以上が志願するので、まだ、優秀な学生を確保できるかもしれない。しかしながら、農学系学部の一員として、他学科の志願状況を鑑みると、農学系への志望学生はひどく減少しており、本学科も危機感を抱かずにはいられない。志願者数を増やすための入試改革が議論されているが、少ない志願者の中から、適格な獣医師のたまごを見つけるための丁寧な選抜法も、並行して考えなくてはいけないようである。

現在、学部では2020年、21年度の入試に関する議論が行われており、教務課の入試担当部署が重要な役割を担っている。彼らが運営している「入学センター」は受験者のための窓口で。月曜日から土曜日の9:00~17:00まで、個別見学や電話・メールでのお問い合わせ、資料配布や過去問閲覧など、受験生の知りたい情報を発信している。

# 編集後記

2018年度は日本各地での甚大な天災が発生しました。全国各地からの学生を抱える私達としましては、気持ちの休まることのなかった年でした。

一方、獣医学教育においてもまさに変革の時期でもあり、皆様におかれましては、社会的な要請に対応すべく一層多忙な日々をお過ごしになったことと存じます。

今回の『獣医学振興』第8号では、特集1「獣医学教育の認証評価」として、私獣協の各大学(プレ受審=日本獣医生命科学大学、2017年度受審=麻布大学、2018年度受審=日本大学および酪農学園大学、2019年度受審予定=北里大学)の受審状況から講評について情報共有できたことは極めて有意義なことだった思います。貴重な情報をご提供くださいまして誠にありがとうございました。

日本学術会議の「わが国の獣医学教育の現状と国際通用性」に関しての提言(2017年3月)の中でも、国内外の社会情勢の多様なニーズに対応できる獣医学教育の質の保証の確立が強調されており、教育の認証評価は不可欠といえます。今回の特集は、情報交換をとおして各大学互いに切磋琢磨し、教育水準の向上を検討するいい機会になったと思います。

2015年1月の中教審の答申を受けて発表された「高大接続改革実行プラン」を基に進められている入試改革において、2020年度より、思考力・判断力・表現力を一層重視する「大学入学共通テスト」へと変貌することが決まっていることから、特集2では「2020入試改革について」ということで、各大学の入試担当者に部署の紹介を含め、入試改革へのお考えを開陳していただきました。「ディプロマポリシーに立脚したアドミッションポリシーを如何に実現すべきか」、「獣医師を目指す志願学生に対して、私達がどう向き合うべきか」、これらは永遠の課題として日々検討を重ねて行きたい内容ですが、今回、貴重なご意見を賜り、今後の入試運営に非常に参考となりました。

毎年のように新しい変革に対応しなければならない昨今ですが、私獣協の皆様と今後とも連絡 連携を緊密に取らせて頂ければと思う次第です。

ご多忙の折、貴重な玉稿を賜った執筆者の皆様に重ねて御礼を申し上げます。

また、本誌の編集にあたり、企画から編集まで懇切に仕上げてくださった、本学の伊藤眞美氏 (私獣協事務局、前学務部長)に深謝いたします。

> 酪農学園大学 獣医学群長 及 川 伸

# **獣 医 学 振 興** 第8号

平成31年3月31日発行

編 集 一般社団法人日本私立獣医科大学協会 当番大学 酪農学園大学 〒069-8501 北海道江別市文京台緑町582番地

T069-8501 北海追江別市又京台線町582番地 011-386-1111 (代表)

印 刷 社会福祉法人 北海道リハビリー

